中島家寄贈目録

―佐伯藩碩学・中島子玉資料等―

中島子玉について

徳川幕府の文教政策重視による全国的な文運興隆の気運を機敏に察してか、佐伯藩では早くも安永六年（一七七七）に藩校の四教堂が開校、そして四年後の天明元年（一七八一）には天下に名だたる佐伯文庫が創立された。

以来藩内興学の府として、教授陣には開校当初の矢野黙斎や山本七兵衛をはじめ、松下筑陰、明石秋室、後には秋月橘門といった当時一流の学者を招聘するなかで藩の子弟教育の振興がはかられていった。

その甲斐あって文化・文政期は佐伯藩の文学大いにふるい、優れた学者や人材が輩出した。その筆頭がなんといっても中島子玉である。

中島子玉は、本名大賚（たいらい）一の字は如玉、米華と号し、また海棠窠（かいどうか）（一に海棠窩）主人、古香外史（ここうがいし）とも号した。佐伯藩徒士中島幹右衛門の長子として、亨和元年（一八〇一）佐伯城下鉄砲町の家に生まれた。幼名盛太郎、のち増太（一に益多・益太）と改める。

子玉は幼少の頃から学問を好み、非常に俊才であったので、藩は将来を見越して資糧を給し、業成って大成したら藩に戻って「国用ニ供セン」との方針により日田の広瀬淡窓に就いて学ばせることにした。文化十三年（一八一六）三月、子玉十六歳のときである。

果して、淡窓の門に入ってわずか二年足らずで塾制の根幹になる月旦評の六級にのぼり、都講となっては塾政を管理したので衆目見張るところとなった。

文政元年（一八一八）十一月、頼山陽が九州へ来歴して淡窓を訪ねた。接待役に選ばれた子玉を見た山陽はそのあまりの若さに一言も言葉を交わさなかったが、後で添削を求められた子玉の詩文を一読してガク然とし、容を改めてその才子ぶりに驚いた。山陽は帰京後、ことあるごとに

「私は西遊して、山水には耶馬渓を得、人材には中島子玉を得た。」

とほめちぎっている。

文政二年七月、子玉は師の勧奨により筑前に遊び、亀井昭陽に従学することになった。昭陽も子玉の才を知り、古詩を贈ってこれを令尹子玉に比したという。

翌文政三年二月また日田に帰って咸宜園の都講となる。同年五月

には開学以来はじめての七級生に昇級し、淡窓が教育した塾生三千のなかにあって頂点をきわめたのである。

文政四年六月子玉は塾を辞し、肥筑遊歴の途に就いた。佐賀に古賀穀堂を訪ねて教えを請うたのも、恐らく長崎へ往く途次のことであろう。同年十一月早急に帰藩せよとの君命により子玉は長崎から日田を経て佐伯に帰省した。

十六歳から二十一歳まで佐伯を留守にした子玉は、その間淡窓はもとより、昭陽・穀堂・原古處・長梅外等の先生老輩に就いて経史百家詩文の研精錬磨を累ね、或いは、雲華上人と邂逅、今や学成って故郷に錦を飾った訳である。

翌文政五年の秋、藩命により江戸に遊学することになり、瀬戸内海を航行して淀川を溯航し、東海道を経て江戸に無事着いたのは初冬の頃か。

文政六年子玉二十三歳で昌平黌に入校、贄を劉侗庵に委ね、林祭酒や松平冠山等に知られて礼遇を受けることになる。最高学府の同校にあっても子玉の評価は材名、詩名ともに高く、まもなく斉長（読書室の室長）にも任じられた。

文政八年四月子玉二十五歳、遊学の期満ちて帰国することとなった。帰藩後は四教堂の教授として、後進の指導にあたったのは勿論のこと、子玉自身佐伯文庫の膨大なコレクシュンを渉猟して学究に励んだであろう。そして文政十年にはこれまでの学問出精の廉により別に一家を興して中小姓格に列せられたのは格別の措置であった。

文政十二年子玉二十九歳、さらに旺盛な研究心を抱いて肥筑から京摂の方へ旅行した。大阪では篠崎小竹を訪ね、京都では頼山陽や猪飼敬所等の諸大家と交遊しながら、文政十三年まで在京したようである。

以後佐伯にあっては四教堂で子弟の教授にあたっていたが、天保四年（一八三三）藩命により正使小林七郎左衛門の介添として日田に差遣された。その時九年ぶりに恩師淡窓と会見し子弟の情を温めたのもつかの間、子玉は病により、翌年三月十五日、三十四歳の若年で逝去した。墓所は久成寺の境内で淡窓の撰になる碑誌銘が刻している。

子玉の生涯は、結果的には佐伯から出遊することの方が多かったが、常に全国的な学芸・学界の動向を視野におさめながら、各地で闊達な研学に勤しみ、その華麗な文才を磨いていったのである。とりわけ、昌平黌在学中に発表した「美人十二詠」（文政六・七年頃か）は、文思が深妙で、詞藻が優雅であったため、忽ちのうちに伝え誦せられ、「宜園秀才」の名は都下に轟いたという。子玉の詩風の特色で唐の季長吉の體に倣った「牛蟲」「地獄変相図」「哭二脩児一歌」「七誕八首」等も文政六年頃の作。「箒」「綬」は、同年十二月三日昌平黌内での物騒な事件を叙したもの。「酔中作歌」等は文政七年の筆作

で聖堂での円熟ぶりを示している。江戸遊学を終えた文政八年、武都を発して佐伯に至る三十日間の様子を書いた随筆「扇録砕話」には子玉の容貌にまつわる笑話も挿入されている。

子玉の面目躍如たるもう一方の代表作に『日本詠史新楽府』がある。頼山陽の『日本詠史楽府』の體に倣って六十六首を連詠、更に旧作の「咬豆」「求餐」を附して日本六十六州二嶋に擬し、それぞれに歴史事象を与えている。

遺著に「愛琴堂全集」八巻がある。この内「蚓竅集」の「抵二木刀村一」「河内路上」「龍川舟遊七首」以下十数首は、淡窓の塾を辞して江戸へ遊学するまでの間、佐伯の四教堂で子弟を教授する傍ら近郊を散策して賦詠したものであろう。中でも長詩「狐公嫁女詞」は、子玉の詩作の才学を存分に発揮したものとして評価が高い。この外、門人高妻芳州等が編纂した『米華遺稿』がよく知られている。

※　※　※

この度、中島家から上記の中島子玉自筆本などをはじめとした関係図書類（六十七部・百二十八冊）並びに書簡類（二巻）・軸物（四十四幅）・落款（印）・蔵書印・子玉愛用の硯類等一式を佐伯市に寄贈していただきました。中島ナヲ氏（別府市在住）には、終始佐伯の地に想いを馳せての御好意に、この場を借りて深く感謝礼申し上げます。

子玉には一子莱太郎があったが、三才にしてこの愛児を失ったため、子玉が興した中島家は日出藩三ノ丸家老長沢多助があとをつぎ、その後、固一郎、宗一と続いて、現在のナヲ氏は子玉より数えて代々孫にあたることになる。

本目録は、碩学・中島子玉の顕彰に資せんがため図書の部を主体に整理したものです。基礎調査にあたっては狩生熊義先生に精力的な労をとっていただきました。衷心より敬意を表します。

なお書目中、子玉以外・中島家伝来の所蔵品も併収しておりますが、その大部においては、まさに子玉が生ある限り彼の全生涯を賭して模索した思想と行動を系統的に裏付けることのできる貴重な資料が多数含まれています。

平成二年三月

佐伯市教育委員会

※　この一文は『二豊人文志』『大分県偉人伝』等により補訂したものです。

中島家寄贈目録

――佐伯藩碩学・中島子玉資料等――

目　次

中島子玉について

古　書　類

中島家旧蔵古書分類目録

一　（準）漢籍（和本）……9

二　国　書（和書）……14

古　書　写　真……25

書　簡　類

巻物一　亀井昱（昭陽）より子玉宛書状……47

巻物二　高島秋帆より子玉宛書状他十三通……48

軸　物（一部）

・毛利高泰……50

・平野五岳……50

・秋月橘門……50

・亀田鵬斎……50

・崔岑画・子玉賛……51

蔵書印・落款（印）他……52
子玉愛用の硯類……52

中島家旧蔵古書分類目録

―中島子玉自著・写本・その他―

凡例

一　この目録は、今回中島家から佐伯市に寄贈された古書を（準）漢籍と和書に分類して収めた。

一　中島子玉に関する図書類は、一部を除き、それぞれについて子玉の自筆か否かの識別は困難であるため、書入・印記・巻頭の首題・内容細目等を参考のため注記した。

一　分類は、図書の全体構成を示すため一応内閣文庫の古書分類法に従って配列した。

一　書名は、原則として本文巻頭に採り、それを欠く場合は題簽等によった。

一　標目とした書名以外の別書名は、（　）内に記した。

一　著（撰）編者名等は本名に続けて、必要に応じ字名や（　）内に号等を付記し、著（撰）者名のみの記載では「著」「撰」を省略した。その他実物になき部分は〔　〕で包んだ。

一　刊行については初版の出版年に続けて（　）内に後印・修年、出版者・書肆（三名までは記載し、三名以上の場合は筆頭と末尾を掲げた）、蔵版者等を記した。出版地のうち浪華・大坂等は「大阪」に統一した。

中島家旧蔵古書分類目録

―中島子玉自著・写本・その他―

一　（準）漢籍（和本）

◎経　部（書　類）

		判	冊数
一　尚　書　考　六巻　写	「此の本は大賚亀井塾に在りし時匆々と写し、今之を読めば謬不少を反省」中島子玉自筆（表紙）。『尚書』は中国古典の中で最も古い伝統をもち、堯・舜以来古代王者の記録。	半	一
二　尚　書　考　上・中・下　写		半	三

（詩　類）

三　詩経古注標記（版心）	（題簽・毛詩鄭箋標註）二十巻（巻七―十二　十八―二十欠）宇（野）成之（東山）　明治補刻（大阪・文海堂蔵）西周から春秋までの歌謡を集めた経典。国風（国々の民謡）、小・大雅（宮廷の儀礼歌）、頌（廟祭歌）に分類。	大	三

（春秋類）

四　春秋左伝考義　（書外題・左伝考義）　写　半　四

鱗（一―二巻）隠公十一年（経）伝・桓公十七年経伝・荘公三十二年経伝・閔公二年経伝・僖公（一―十五）年経伝

鳳（三巻）　僖公（十六―三十三）年経伝・文公十八年経伝・宣公十八年経伝

亀（四巻）　成公十八年経伝・襄公三十一年経伝

竜（五巻）　昭公三十二年（経）伝・定公十五年経伝・哀公二十七年（経）伝

『左伝』は魯国の編年史『春秋』三伝の一。「経」中に「伝」を分割して相付す。

五　左伝春秋雕題略　（題簽・雕題）　写　半　六

第一冊　自隠公至閔公　自一巻至四巻

第二冊　僖公　五巻

第三冊　自文公至成公　自六巻至八巻

第四冊　襄公　九巻

第五冊　昭公　十巻

第六冊　自定公至哀公　自十一巻至十二巻止

晋・杜預集解により雕題解釈を施す。海棠窩印あり。

（群経総義類）

六　七経雕題略　（題簽・書経雕題二）　残本（書之下）　写　中　一

子玉印あり。

（四書類）

七　論語語由（書外題・語由）二十巻（巻一―四欠）　亀井魯・道載（南溟）撰　亀井昱・元鳳（昭陽）校　写　中長　三

海棠窩蔵とあり。

八　論語（見返・改正冢註論語）十巻（巻三―六欠）　冢田虎（大峯）注　天明四初上木（文政三校正改刻）（雄風館）　半長　三

九　（明治訓点）四書集註（題簽）　大学章句・中庸章句各一巻　論語（集註）十巻（版心四巻）　孟子（集註）十四巻（版心四巻）　久留間與三点　明治十七刊（大阪・岡本仙助、中野啓蔵）（東同盟舎梓）　特小　五

（小学類）

一〇　字彙　子集一二・丑集三上・寅集三下・卯集四上・辰集四中・巳集四下・午集五・申集六下・戌集八九・亥集十～十七・首尾各一巻（有欠）　明梅鼎祚撰　梅膺祚音釈　刊不明（鹿角山房蔵版）　半　一二

楷書の書数により排列した辞典。

一一　三字経　宋王応麟　写　半　一

幼童を対象にした代表的テキスト。中国の各時代の変遷、学問の仕方など常識的内容を説く。

一二　（増補註解）詩韻含英異同弁（題簽）　十八巻　清劉文蔚編　谷喬補　明治十二刊（大阪・松村九兵衛、柳原喜兵衛）（此村庄輔蔵版）（銅版）　特小　四

◎子　部（雑家類）

一三　（標題徐状元補注）蒙求校本　（題簽・箋註蒙求校本）上・中・下三巻・附官職考略　岡白駒（龍洲）撰　佐々木玷（向陽）標疎　安政五刻成（明治四再版）（大阪・山内五郎助、河内屋亀七等）　大　三

『蒙求』は、古代より南北朝までの古人の有名な言行・事績を一話四字、二句対偶、八句換韻で表わし、もともとは児童の諷誦習得用教科書として通行。標題に詳注を施す。

（小説家類）

一四　世説音釈　存六巻（巻五―十）　恩田仲任（蕙楼）編　東四郎等　岡田守常校　文化十三刊（江戸・前川六左衛門、尾張・片野　大　三

明・王世貞『世説新語補』にもとづく注釈書（後漢末から東晋末へかけての士大夫の逸話集）。

◎集　部（別集類）

一五　唐李長吉歌詩　四巻・外巻一巻　唐李賀撰　宋呉正子注　劉辰翁評　文政元刊（官板）　半長　三

一六　王維詩鈔　唐王維　写　半　一

王維抜萃（『五古・和使君五即西楼望遠思帰』外）。中島季正蔵書（花押）。子玉印あり。

一七　忠雅堂詩鈔　乾・坤　清蔣士銓　写　中長　二

『自丹陽放舟赴江陰道中作』外。中島益太蔵書。海棠窩・子玉印あり。
蔣士銓は清の詩人、戯曲作家。

『自丹陽放舟赴江陰道中作』外。中島益太蔵書。海棠窩・子玉印あり。
蔣士銓は清の詩人、戯曲作家。

一八　忠雅堂詩鈔（四全）　清蔣士銓　写　半　一

『河口』外。子玉印あり。

一九　尭峰文鈔　清汪琬　写　半　一

『大通橋分司壁記』外。
汪琬は清、長洲の人。順治十二年の進士。明史の編集にも與かり、文は根柢を経史に置く。

（その他）

三〇　〇　雑抄（書外題）　写　半　一

元好問（『五古―猟城南』外）詩鈔と国朝詩別裁（慎郡王『雙径』外）を収む。
巻末に「海西第一風流刺史米華集」、裏表紙に「芳洲海棠窩蔵」とある（門弟高妻芳洲の戯書か）。子玉印あり。

※一は亀井昭陽、四は亀井南溟、五・六は中井積徳（履軒）の撰か。

二　国書（和書）

◎総　記（叢　書）

		判	冊数
一　海棠窩叢書　中島子玉編　写		小長	四

龍集　薔薇園小稿〔頼山陽詩文集〕
虎集　中興五侯詠・洪範図解・栗山堂射字戎・病餘韻語・流水詩藁・琉球人和歌・回文類聚続編図鈔
鼠集　保建大記〔巻上・下〕
兎集　近人文醇〔頼襄・子成（山陽）、斎藤魏、柴野允升（碧海）、祇園瑜（南海）、日本史表、葛西質（因是）〕
近人詩醇〔中井積善（竹山）、竹村蕢（悔斎・海蔵）、篠崎弼・承弼（小竹）、林衡（述斎・蕉軒）〕
海棠窩と記し、子玉印あり。

◎仏　教（寺院・寺誌）

		半	一
二　二十四輩順拝図会　存一巻（巻四・越後之部）零本〔釈了貞〕刊不明			

◎言　語（音韻・字音）

		半	一
三　韻鏡聞書　写			

音韻四声反切の原理。京都三条了蓮寺無相文雄上人伝。
臼杵の鶴峯戊申より受け継ぎ、聞書として記録。子玉印あり。

音韻四声反切の原理。京都三条了蓮寺無相文雄上人伝
臼杵の鶴峯戊申より受け継ぎ、聞書として記録。子玉印あり。

（辞書・字典）

四　四声解環　皐門注　太田屋顕校　安政五官許（明治七再刻）（大阪・岡田茂兵衛蔵版）（銅版）　特小　一

五　（大増補）四声解環　皐門撰　太田屋顕校　明治十附言（大阪・三木、岡田蔵版）　特小　一

六　（畫引節用）明治正字典　（鼇頭漢語明治無雙玉編・国民実益明治いろは字典）古座谷徳次郎編（明治三十九・七版印）（大阪・千葉久栄堂蔵）（銅版）　特小　一

◎文学（漢文・詩文評・作詩作文）

七　絶句類選　（題簽・絶句類選評本）二十一巻　津阪孝綽（東陽）編　斎藤正謙（拙堂）評　明治十五刊（大阪・桂雲堂梓行）　特小　五

（漢文・総集）

八　今人詩英　藤森大雅（天山・弘庵）編　文政七序　刊不明　中長　一

子玉の『昌平舎書懐十首之一（寮法不許飲酒故及）』を収む。海棠窩印あり。

（漢文・別集）

九　愛琴堂全集　中島子玉　小長　七

第一冊　詩　美人十二詠 並序（髪、眉、耳、目、鼻、口、靨、肩、乳、手、腰、足）・送二大含上人一還二京師一・重陽・中秋無レ月・題レ画・箒・綬・節婦吟・陽妃春睡図和二徐文長韻一・倣二昌

谷體一　外（甲申の筆作多し）

第二冊　轂音集巻之三　奉レ別二南梁先生（長梅外）一・専念寺詩会得レ歌・彦山上宮・宿二彦山一・論レ詩效二元遺山體一　外

蚓竅集巻之四　観二挿田一・席上呈二高嶋米山一・八月十四日・抵二木刀村一・河内路上・龍川舟遊七首・詠史・狐公嫁女図・宿函根駅・大堰川・牛蠱倣二李長吉躰一・題二地獄変相図一倣二李長吉體一・哭二脩児一歌倣二長吉體一　外

第三冊　・談俠巻上　水野十郎右・三浦小次郎・小出兵助・放駒四郎衛・梦市郎兵・牛五衛・金神長五郎・茂衛・臂久八・白輿三右・唐犬十右猪首勘衛（巻末に水筑周逸写とあり。）

談俠巻下　鐘彌左・三郎衛・深見貞国・寺西閑心活不動与衛・滅金喜右・今若三右・猪瀬荘衛・鷺森伝右・死人小右・小五郎衛・腕喜左・桜井丹波・平井権八・神祇党（巻末に吉野定吉写とあり。）

第四冊　理窟瑣記　孝経・孟子語有二圭角一・論語之唐棣斉詩之逸・殷庶・子姪・伯楽・孟子行二井田法一・蒼生・五礼・一天五帝・騎・詩経字数・大学・蔵二書於壁中一・九嬪世婦・乗居・賤貨　外

理窟瑣記　項羽本紀在二高祖之前一・司馬相如論賛後人之筆・火馬・白起以後之多殺・孟子東坡長二於譬喩一　外

理窟瑣記　霧行・毛利・毛利判官・守君・高屋之歌非二仁徳帝一　外

第五冊　理窟瑣記　山椒魚・楽天不レ知レ詩・四李杜・八行・天然佳対　外

理窟瑣記　定家之言・唐之詩文・邦俗以二九月十三夜一賞レ月・八月十五日九月十三日婁宿清明故以二此両夜一翫レ月・日蓮放二佐渡一九月十三夜向レ月訴レ冤・楽天詩曰金釵十二行　外

理窟瑣記　秋風客・詠二陶詩一・螺山詩・恒遠・浮島・涼字・六朝句・東坡云李杜之後詩人

継作・近体詩・柳宗元之詩如二冬日之日一章応物之詩如二夏月之月一・東坡論二書詩一・杜少陵詩・元遺山論二蘇黄詩一　外

第六冊　理窟瑣記　俗語各有レ所レ本・芙蓉非二山名一・山海経・日田川多二香魚一

理窟瑣記　小野道風古之善レ書也・仁斎伊藤先生年十七詠二琵琶湖一・秋玉山畢生所レ願三・栗山先生・頼子成与レ人相接常掛二鏡眼一・淡窓広先生・東厓先生・頼子成作二日本外史一・春台曰仁斎東厓皆温厚君子也・亀鵬斎在二萬八橋上一作二書画一・角觝・婦人不二立溺一・婦人削眉・湯祈誓・媚薬・魚酔・桃符・口琵琶・角屐之始・櫛巻之始・青日傘始・陶器肥前為レ上・備前徳利・禅制・厠上用二紙帛瓦礫厠籌一・韓慕廬嗜レ烟・夜鷹・本邦所産硯・古硯・二本松異獣・山伏・鏡石・魚石樹葉石　外

第七冊　雑文　説鬼室文稿—王導論・奉レ復二穀堂先生一書・菅公不レ為レ雷弁　説鬼室文稿—四怪・答二広瀬謙吉一書・学琴説・読二魯仲連伝一・孝婦録序・七誕八首発未課題三十首之一二日而成・扇録碎話—松生翁・馬夫謡・飲馬食輿・鰻・対語・駅妓・不レ見二冨士一・短令・鼸鼾・一桜二橘・賭酒・蚊不レ死・読二王荊公文一・売二西瓜一者言・送二加藤公傑一序・送二黒瀧元師一序・観碁・策論節用

以上、各冊の首題や文頭の一部を摘録

全八巻（冊）ありしも一本を失いたる高妻友（芳洲）の奥書（天保十三年）あり。子玉の代表作（肉筆）とされるもの。

一〇　愛琴堂全集抜萃　写　半　一

子玉二十三歳・文政六年の自序あり。江戸昌平黌在学中の撰（『題童殺集首』外）。版心四教堂蔵。

一二　愛琴堂全集抜萃　写　半　一

子玉二十五歳頃の撰（『扇録砕話―松生翁』外）。版心四教堂蔵。

一三　〔日本〕詠史楽府六十六闋　頼山陽　写　半　一

文政十二年篠崎小竹書後あり。

日本詠史続楽府　写

子玉二十九歳の時、小竹の処にて山陽の日本楽府を観て自らも志して模作。両者一冊に合本、「日本詠史楽府」となす。

一三　日本詠史新楽府　写　半　一

子玉の前書楽府を別冊にしたもの。

一四　米華遺稿　写　半　一

広瀬淡窓に提出して評を仰いだ稿（『燈下梅影』外）。

一五　慊園敝帚　仁科幹巻頭言　広瀬先生（淡窓）評　青霞秦貞（秋室か）謾批　写　半　一

子玉詩文集（『過友人故居』外）。

一六　遠思楼詩集（二）　広瀬建・子基（淡窓）　写　半　一

淡窓の詩集（『論詩贈加峯長郷中島子玉』外）。「遠思楼」は淡窓の書斎名。

一七　古序翼　六巻（天・地・人）亀井昱・元鳳（昭陽）写　半　三

版心・春星草堂。子玉印あり。

一八　昭陽文集　雅・頌（風集欠）亀井昭陽　写　半　二

子玉印あり。

一九　南冥詩草　亀井南溟　写　半　一

寛政元年起草（『書懐二十四首』）。

二〇　百羅屯教練　写　大　一

自一教至三教。昌平坂学問所用箋で子玉が学生時代に課題として求められた題詠を収む（古賀穀堂の評あり）。

『美人十二詠』あり。子玉二十四歳頃のもの多し。

二一　叢薈録　経説部二　月鈔（甲申）　写　半　一

子玉二十四歳、在都期間中の論説。

二三　淹斎敝帚（甲申）　写　半　一

策・駱駝説・狄仁傑論・留侯不立韓後論・詩論弁折四則・薬師寺伯徳君墓碑銘・遊避東風記・同声社摇会約・記鷲・記秋海棠・論賤岳之戦・春瀑石銘并叙・書養賢寺上梁板・升降管賦・題西征草首・題文天祥忠孝二大字・西郷翁夫婦合葬墓碑銘

以上、子玉が在都の頃の作品十七首を摘録。

三三　淹斎詩帳（己丑）　写　半一

文政十二年稿（『宇野巳己蔵送予到馬声満家再宿而別』外）

二四　侗庵先生詩文所見手鈔　古賀煜（侗庵）写　半一

慶応元年（乙丑）劉石舟より托送依頼の趣旨書あり（表紙）。巻末に『鬼神論』を収む。

二五　拙文三首　写　半一

子玉稿（『猪飼敬所先生七十寿叙』『張子房論』『狄仁傑論』）。

二六　策（論節用）　写　半一

淹斎敝帚『策』と共に子玉の真摯な論策。

二七　草稿（戊寅）　写　半一

子玉が日田咸宜園の学生の頃の稿（『詠国史』外）。

二八　鄙稿　写　半一

舟之（子玉か）稿（『奉呈備後菅（茶山）先生書』）。

二九　艸稿　写　半一

子玉稿（『奉呈空石先生』『日田雑詠二首』外）。

三〇 草稿 写　子玉稿（『雙奇亭記』外）。　半　一

三一 草藁 写　子玉稿（『夏日村居』外）。　特小　一

三二 鄙稿 写　子玉稿（『題淵明帰去来図』外）。　半　一

三三 山陽遺稿　文・十巻　詩・七巻　拾遺・一巻附行状　頼山陽　明治十二刊（中島徳兵衛蔵版）　特小　五

三四 橘門韻語　乾・坤二巻　秋月龍（橘門）著　秋月新太郎選　谷永祚校　明治十六刊（東京・博聞社）（暁翠書堂蔵版）　半長　二

（漢文・日記・遊記）

三五 西帰紀行　石川剛（彦岳）安永九　写　巻末に「天保辛卯小春十日、四教堂ニ於イテ写了、時ニ冬雨蕭々トシテ晦ノ如シ。米花子」との奥書あり。　半　一

（和歌・歌論・作法）

三六　初学和歌式　存三巻（巻一―三・上巻）残本　〔有賀長伯〕刊不明　半　一

（和歌・撰集）

三七　躾方百人一首・女訓宝文庫（題簽）　刊不明（大阪・賓本伊三郎、福富藤吉）　半　一

三八　（標註）七種百人一首　佐々木信綱　明治二十六刊（博文館）　（菊）　一

◎日本史（通史）

三九　国史略　自後鳥羽帝　至順徳帝　写　半　一

（雑史）

四〇　赤穂四十七士伝　（初三葉を欠く）（青山延光か）不全本　写　半　一

四一　義人遺草　一巻附一巻　青山延光（佩弦斎）編　天保六序　天保十二佐佐木重之跋　慶応二刊（京都・勝村治右衛門、水戸・須原屋安次郎等）（江戸・王山堂、水戸・東壁楼）　半　一

（伝記）

四三　龍渓矢野文雄君伝　小栗又一　昭和五刊（東京・春陽堂）　（菊）　一

（系譜・諸家）

四三　諸家略伝　写　大　一

大内氏・大友氏・立花氏・高橋紹運・浮田氏・蒲生氏郷・蒲生郷舎・尼子氏・土州一條氏・長曽我部氏・田中吉政・大谷吉継・長束正家・増田長盛・齋藤利三・冨田高定・後藤基次・江口三郎右衛門・黒田三臣を収む。

（史料）

四四　合衆国伯理璽天徳書翰和解（プレジデント）　写　特大　一

合衆国伯理璽天徳副翰和解

合衆国水師提督上書和解

合衆国水師提督口上書和解

嘉永六年木許要之進写　木村重信主とある。

◎理　学（化学）

四五　新式有機化学　存一巻（巻下）残本　高橋正純閲　有沢基次校　松岡文橘訳　明治十二刊（大阪・柳原喜兵衛）（積玉圃蔵版）　半　一

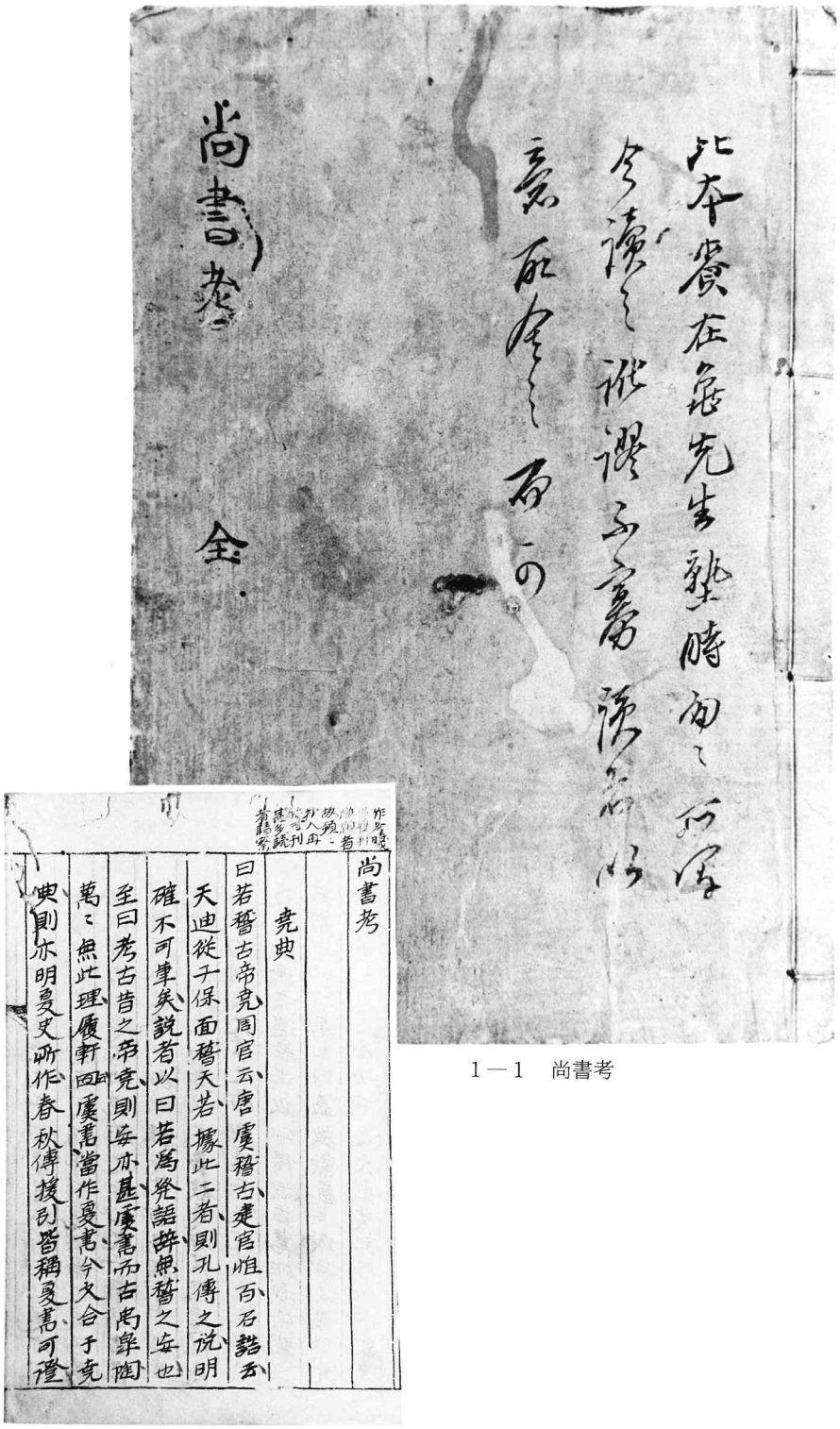
◎（その他）

四六　（『五帝授受之次　歌』外）　不全本　写　半　一

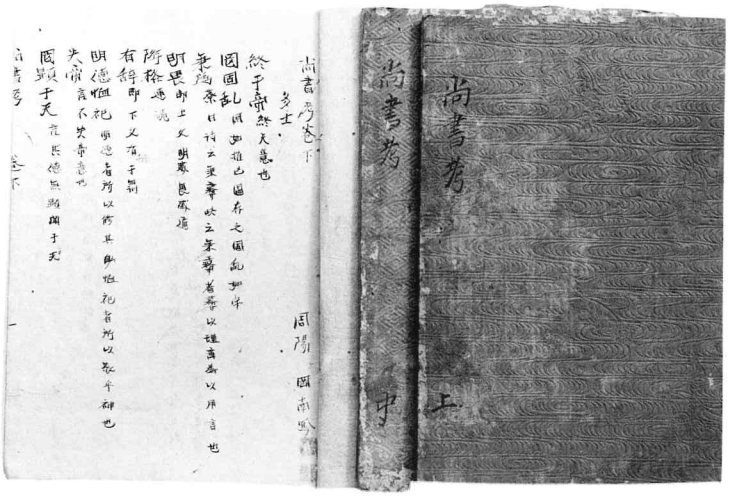
四七　（『東涯論氏姓』）　存零葉一葉　写　半

版心・蘭雪堂叢書の用箋なるも筆者不明。

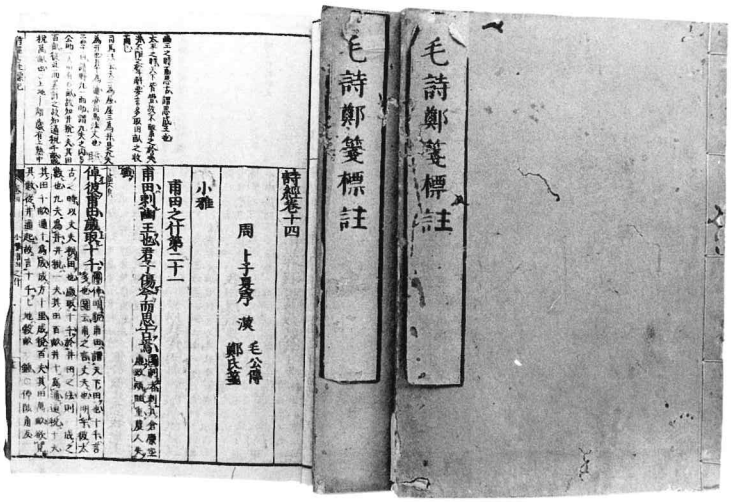
※国書総目録には、「愛琴堂詩醇」「愛琴堂詩鈔」「愛琴堂集」「如蘭詩集」「中島米華稿本」「日本詠史新楽府（文政十二）」「米華遺稿」「米華雑著」等の書目記載があり、このうち、内閣文庫には、「日本詠史新楽府」（明治二年刊）が所蔵されている。


尚書考
全
尚書考
堯典
曰若稽古帝堯周官云唐虞稽古建官惟百石誥云
天迪從子保面稽天若據此二者則孔傳之説明
確不可畢矣説者以曰若爲発語辭無稽之妄也
至曰考古昔之帝堯則妄亦甚虞書而古典皋陶
謨亡無此理履軒曰虞書當作夏書今文合于堯
典則亦明夏史所作春秋傳援引皆稱夏書可證

1－1　尚書考

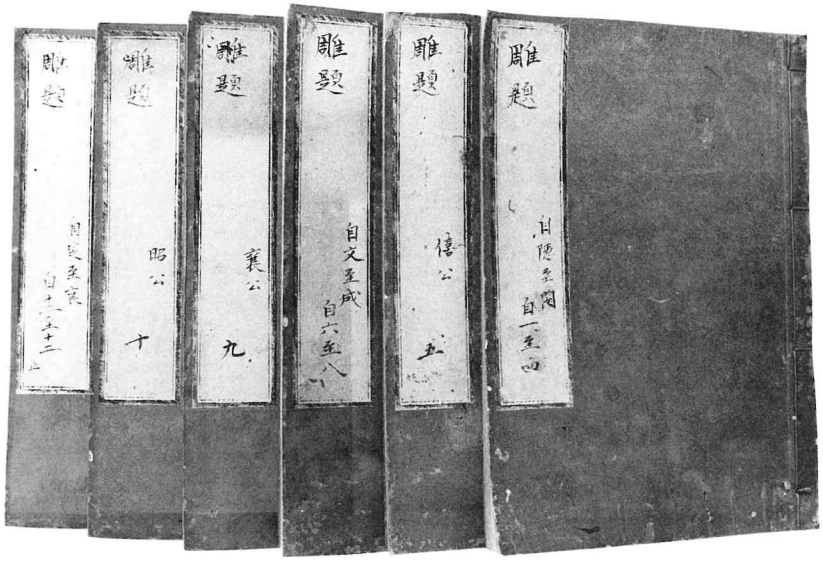


1－2　尚書考

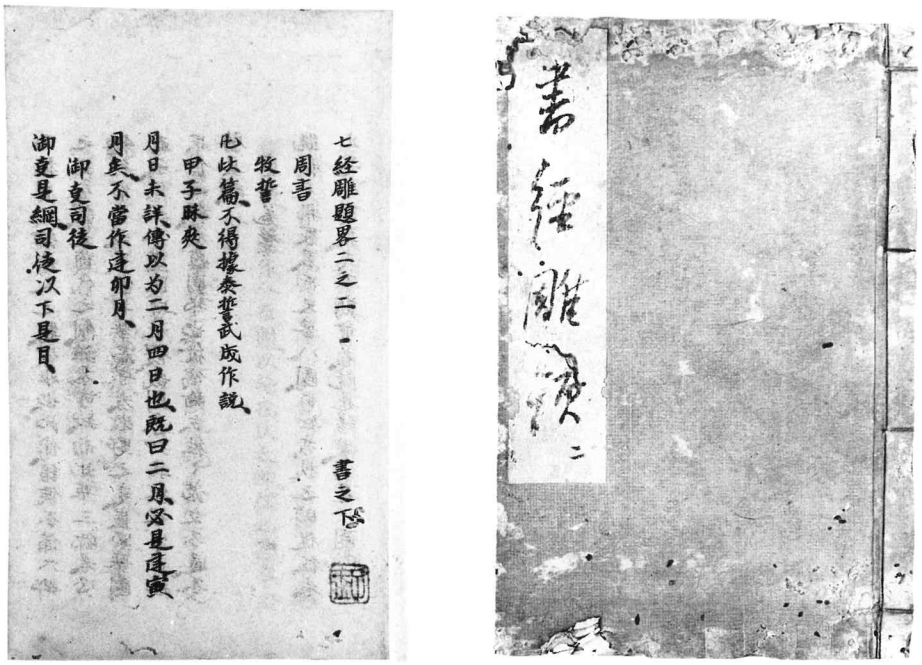


1－3　詩経古注標記

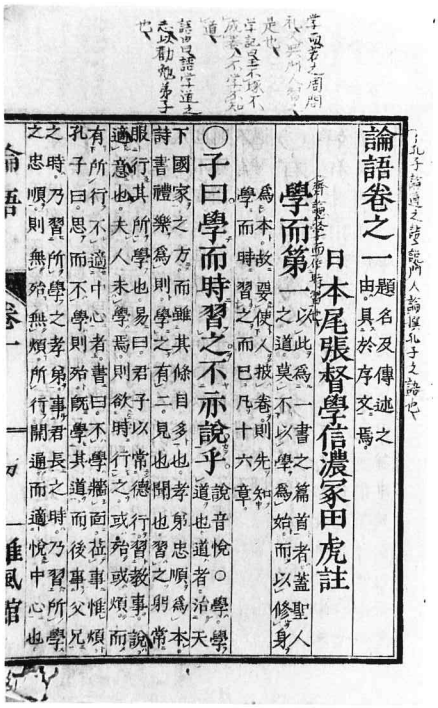
1－4　春秋左伝考義



1－5　左伝春秋雕題略



1－6　七経雕題略



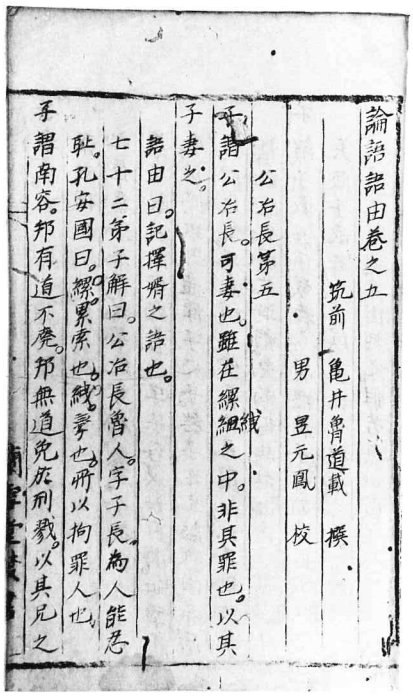
論語卷之一　題名及傳述之由具於序文焉

日本尾張督學信濃家田虎註

學而第一　蓋聖人之道莫不以學爲始而以修身爲本故要使人披卷則先知學而時習之而已凡十六章

○子曰學而時習之不亦說乎　說音悅○學學道也道者治天下國家之方而雖其條目多也孝弟忠順爲本詩書禮樂爲則學之有二見也開也習之朋常眼行其所學也易曰君子以常德行習教事說適意也夫人未學焉則欲時行之或矜或煩而有所行不適中心者書曰不學牆面莅事惟煩孔子曰思而不學則殆既學其道而後事父兄之時乃習所學之孝弟事君長之時乃習所學之忠順則無殆無煩所行開通而適悅中心也

1—8　論語



論語語由卷之五

筑前　亀井魯道載　撰

男　昱元鳳　校

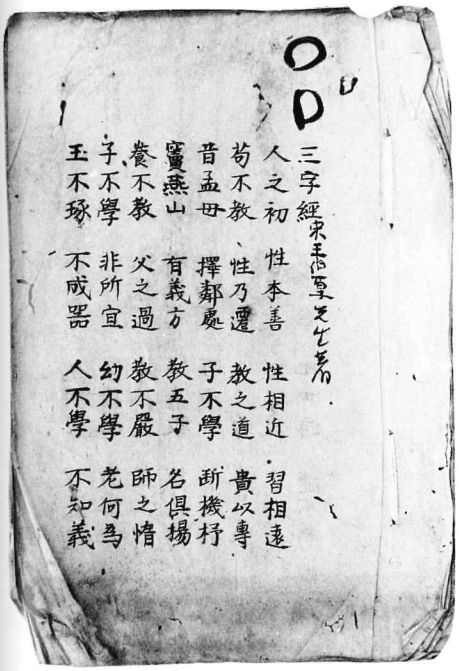
公冶長第五

子謂公冶長可妻也雖在縲絏之中非其罪也以其子妻之

語由曰記擇壻之語也

七十二弟子解曰公冶長魯人字子長爲人能忍恥孔安國曰縲累索也絏絰也所以拘罪人也子謂南容邦有道不廢邦無道免於刑戮以其兄之

1—7　論語語由

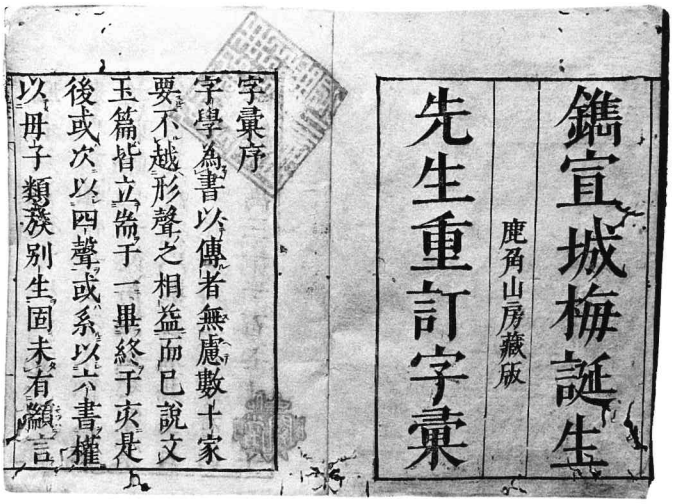


○

三字經宋王伯厚先生著

人之初　性本善　性相近　習相遠
苟不教　性乃遷　教之道　貴以專
昔孟母　擇鄰處　子不學　斷機杼
竇燕山　有義方　教五子　名俱揚
養不教　父之過　教不嚴　師之惰
子不學　非所宜　幼不學　老何爲
玉不琢　不成器　人不學　不知義

1—11　三字經



鐫宣城梅誕生

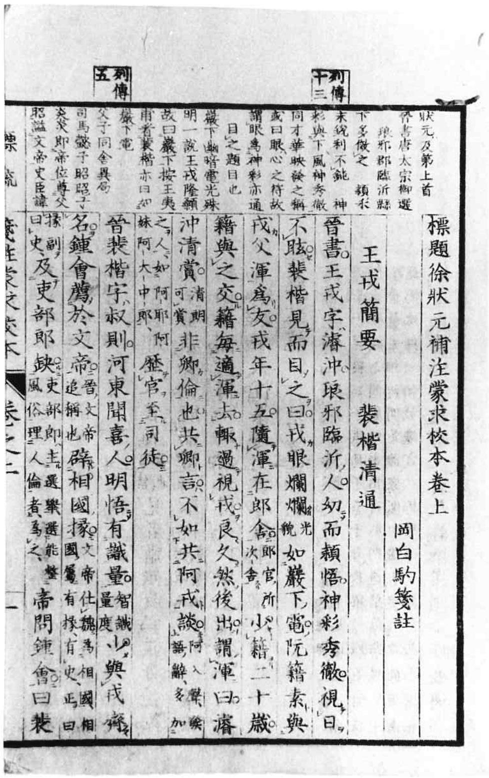
鹿角山房藏版

先生重訂字彙

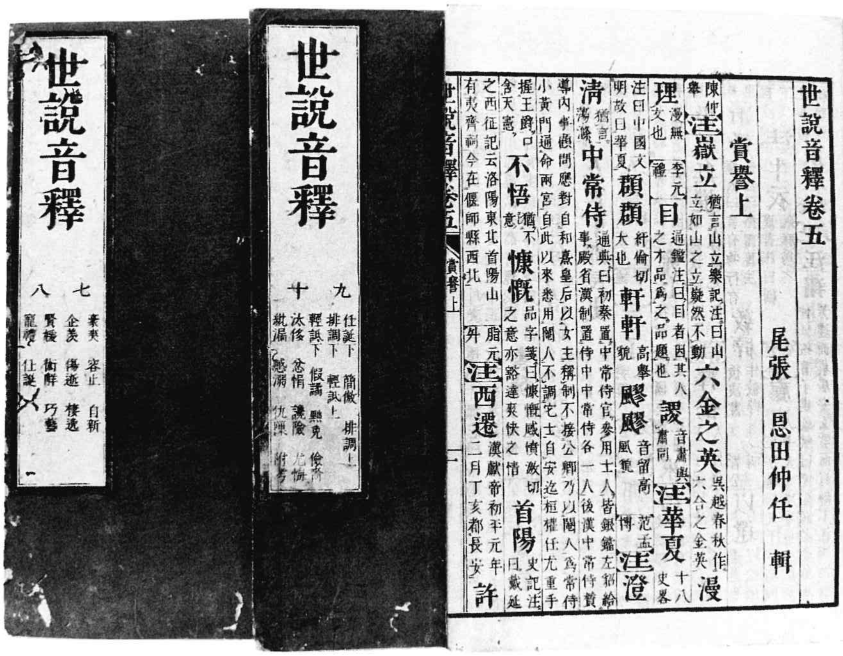
字彙序

字學爲書以傳者無慮數十家要不越形聲之相益而已說文玉篇皆立偏旁一畢終于亥是后後或次以四聲或系以六書權以毋子類族別生固未有顯言

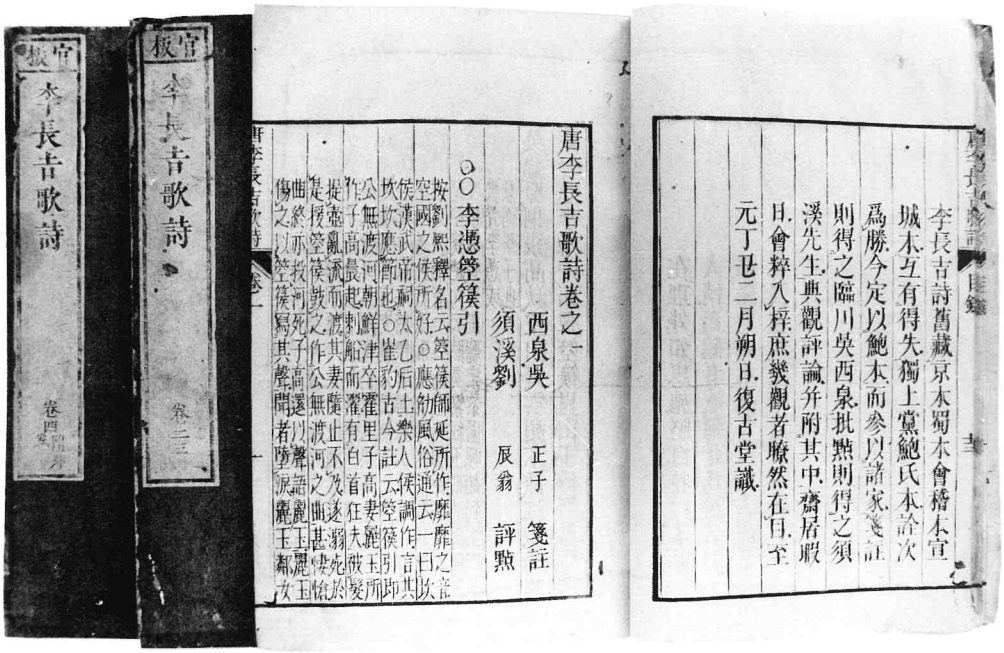
1—10　字彙


標題徐狀元補注蒙求校本卷上
岡白駒箋註
王戎簡要　裴楷清通

1 —13　(標題徐狀元補注) 蒙求校本


世說音釋
世說音釋卷五
尾張　恩田仲任　輯
賞譽上

1 —14　世説音釈



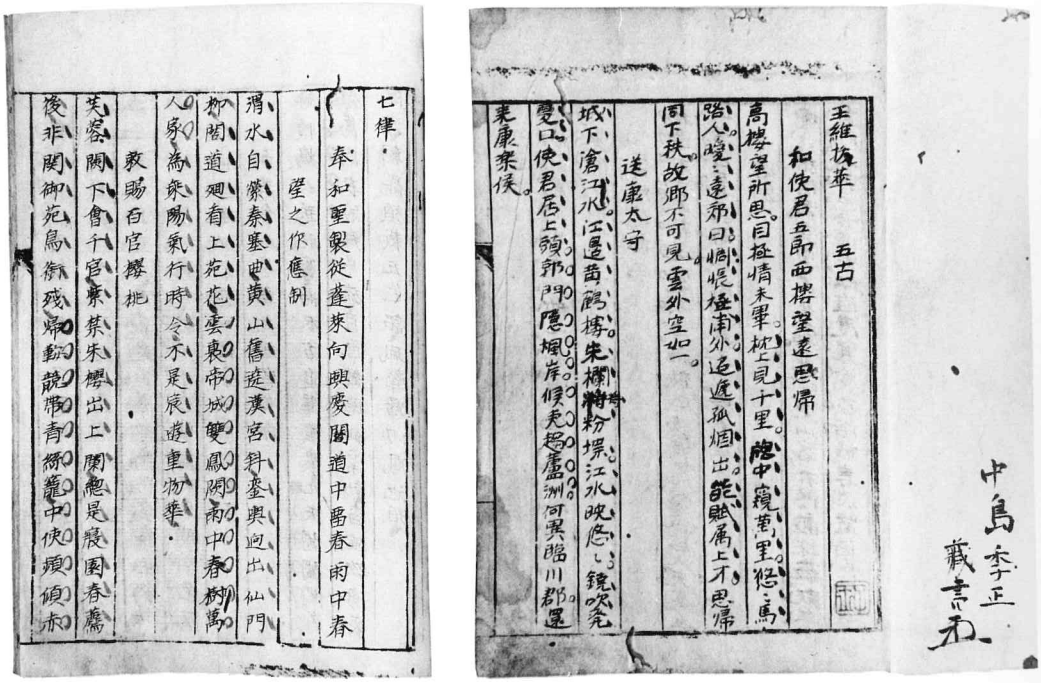
唐李長吉歌詩卷之一　西泉吳　正子　箋註
須溪劉　辰翁　評點

○○李憑箜篌引

按劉熙釋名云箜篌倆延所作靡靡之音空國之侯所好○應劭風俗通云一曰坎侯漢武帝嗣太乙后上樂人侯調作言其坎坎應節也○崔豹古今註云箜篌引即公無渡河朝鮮津卒霍里子高妻麗玉所作子高晨起刺船而濯有白首狂夫被髮提壺亂流而渡其妻隨止不及遂溺死於是援箜篌鼓之作公無渡河之曲甚悲愴曲終亦投河死子高還以聲語麗玉麗玉傷之以箜篌寫其聲聞者墮淚麗玉都女

李長吉詩舊藏京本蜀本會稽本宣城本互有得失獨上黨鮑氏本詮次爲勝今定以鮑本而參以諸家箋註則得之臨川吳西泉批點則得之須溪先生典觀評論并附其中齋居暇日會粹入梓庶幾觀者瞭然在目至元丁丑二月朔日復古堂識

1—15　唐季長吉歌詩



王維詩鈔　五古

和使君五郎西樓望遠懷歸

高樓望所思自極情未畢枕上見千里隱中窺萬里怨焉路人愛遠郵日晴悵登甫外迢遞孤烟出能賦屬上才思歸問下秩故鄉不可見雲外空如一

送康太守

城下滄江水江邊苗鶴塢朱欄粉堞江水晚悠悠鏡吹凌雙口使君居上頭郭門隱楓岸候兎趨蘆洲何異臨川郡還來康樂侯

七律

奉和聖製從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制

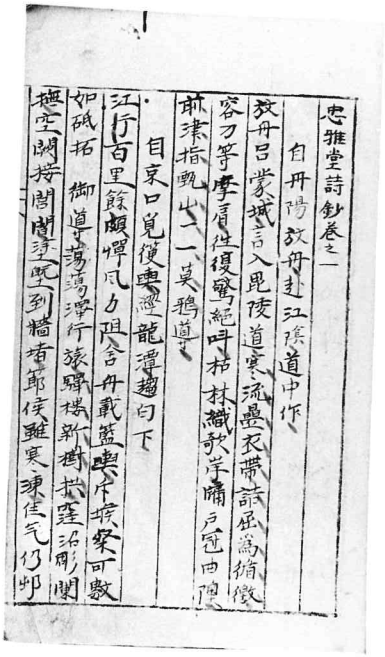
渭水自縈秦塞曲黃山舊繞漢宮斜銮輿迥出仙門柳閣道迴看上苑花雲裏帝城雙鳳闕雨中春樹萬人家爲祭陽氣行時令不是宸遊重物華

敕賜百官櫻桃

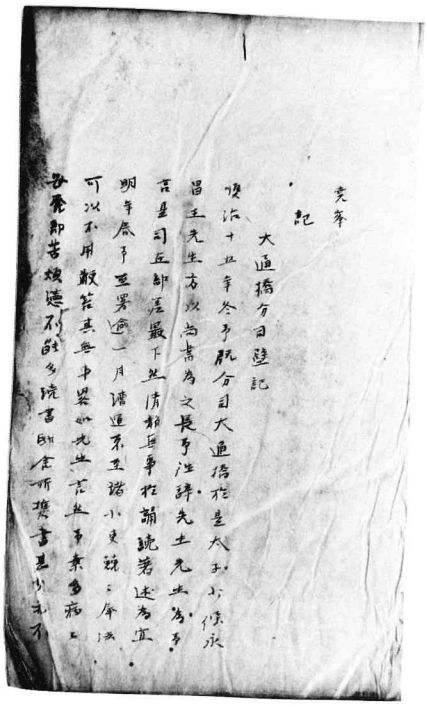
芙蓉閣下會千官紫禁朱櫻出上闌憲是殿園春鳳後非關御苑鳥銜殘歸軍競帶青絲籠中使頻傾赤

中島季正藏書

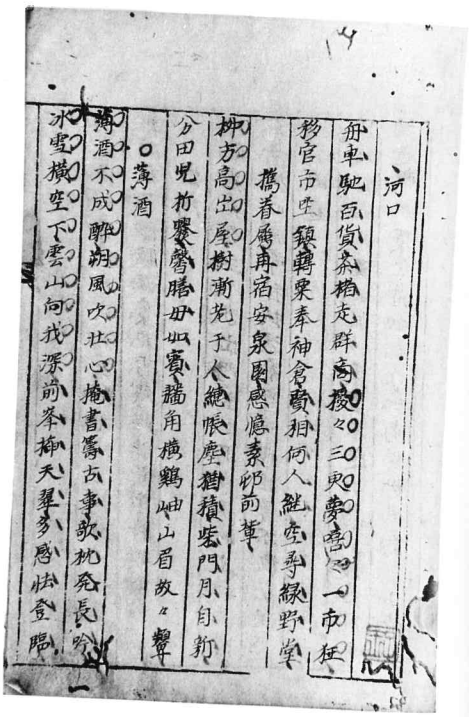
1—16　王維詩鈔



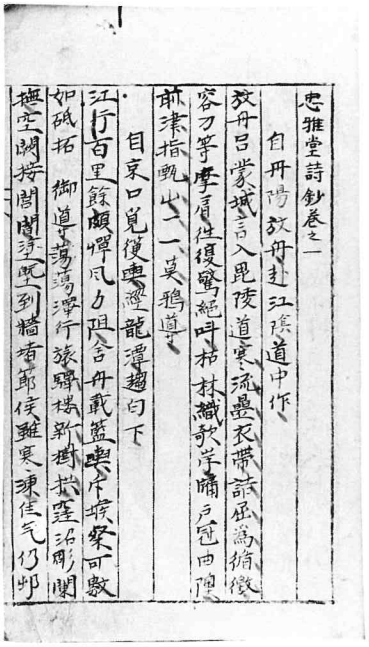
1—17　忠雅堂詩鈔



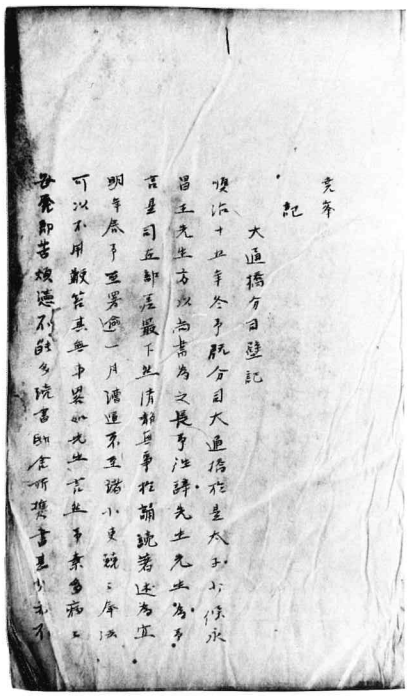
1—19　堯峰文鈔



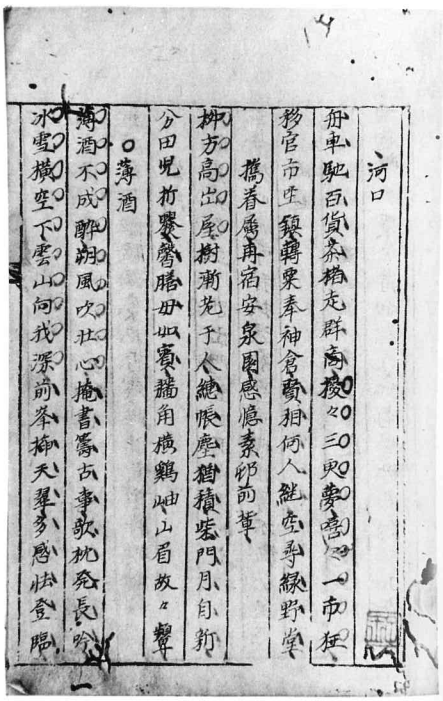
1—18　忠雅堂詩鈔（四全）



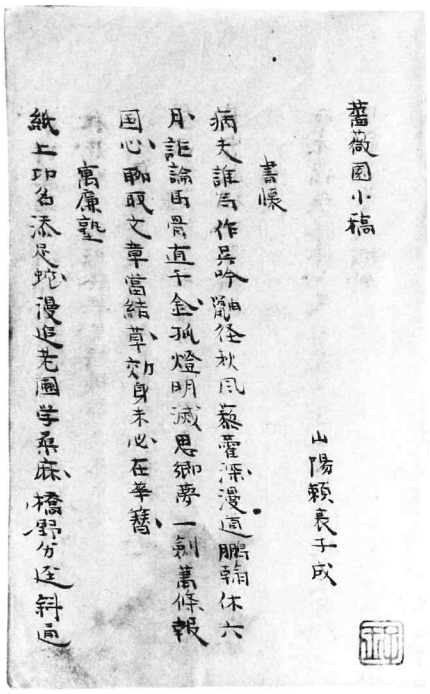
1—17　忠雅堂詩鈔



1—19　堯峰文鈔



1—18　忠雅堂詩鈔（四全）


薔薇園小稿

書懷

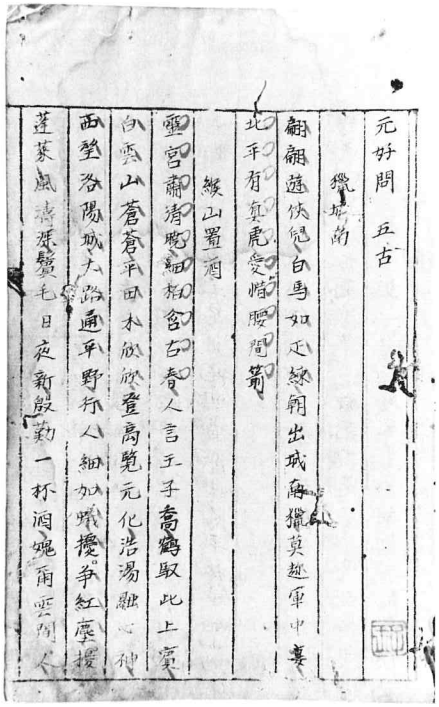
山陽頼襄子成

病夫誰与作吳吟 [illegible] 秋風慕霞深漫道 [illegible] 休六
月詎論由骨直千金孤燈明滅思鄉夢一剣蕭條報
国心聊取文章當結草効身未必在華簪

寓廉塾

紙上功名添足蛇 漫追老圃学桑麻 橋邊分逕斜通

2—1　海棠窩叢書（龍集）


元好問　五古

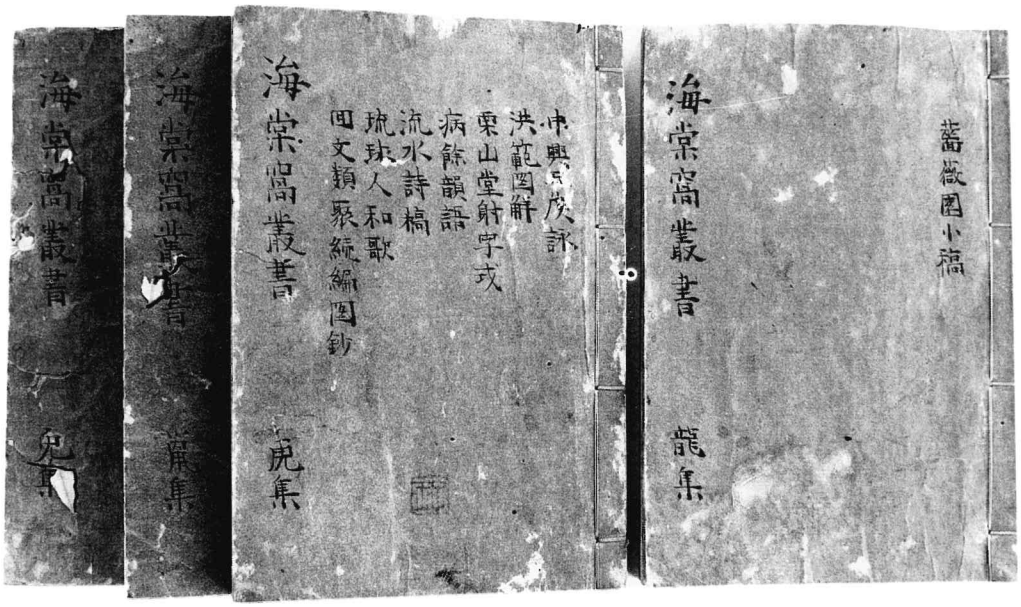
獵騎南

翩翩遊侠兒白馬如迅雷朝出城南獵莫逃軍中要
北平有奥虎愛惜腰間箭

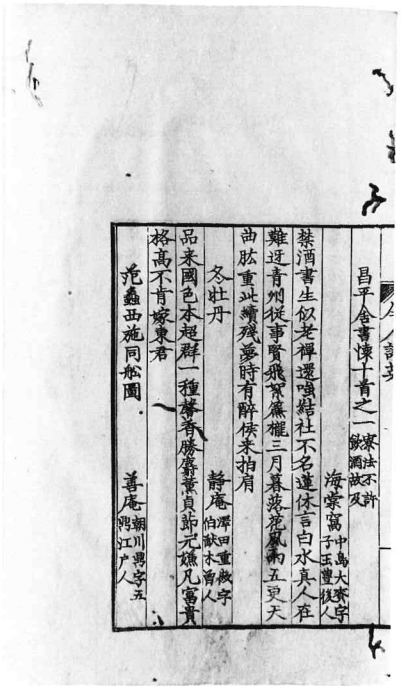
綴山置酒

壓宮鼎清歌編相合古春人言王子喬鶴取此上賓
白雲山蒼蒼平田木欣欣登高覽元化浩蕩融心神
西望咸陽城大路通平野行人細如蟻攘攘爭紅塵
蓬蒿風清塵鬢毛日夜新殷勤一杯酒媿爾要問人

1—20　□雑抄



2—1　海棠窩叢書



昌平舍書懐十首之一　塞法不許飲酒故及

海棠寓　中島大賚字子玉豊後人

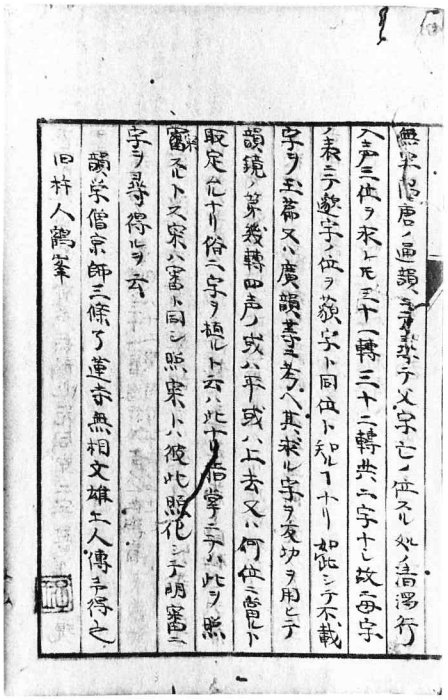
禁酒書生似老禪還嗜猪社不名蓮休言白水真人在
難迓青州從事賢飛翼簾櫳三月暮蕉花窗雨五更天
曲肱重此殘夢時有醉侯来拍肩

冬牡丹　澤田重敏字伯敏木曽人

品来國色本超群一種摩肯勝寡貴貞節元嫌凡富貴
格高不肯嫁東君

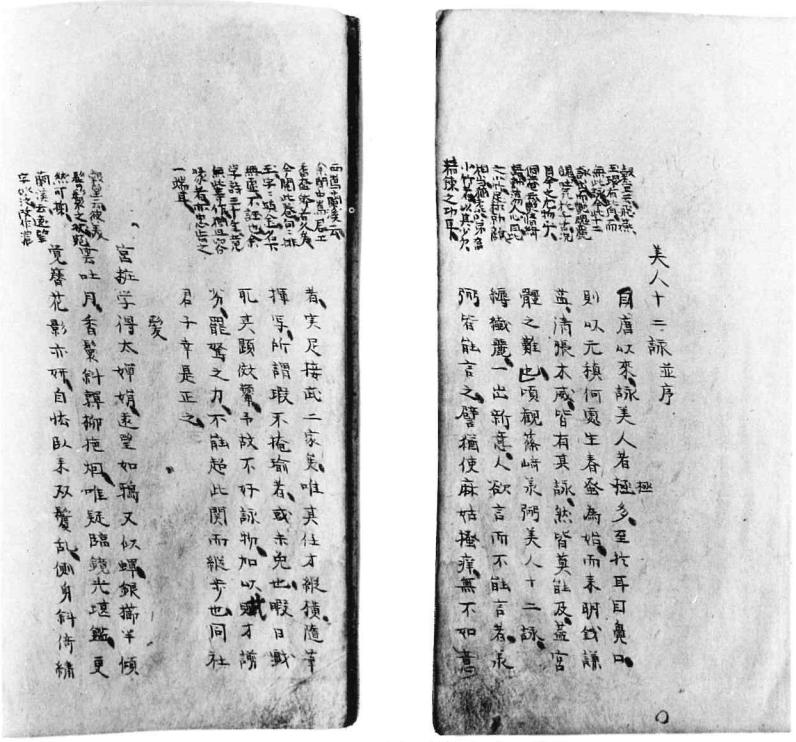
泛蟲西施同舩圖　善庵　朝川善庵字五郎江戸人

2－8　今人詩英

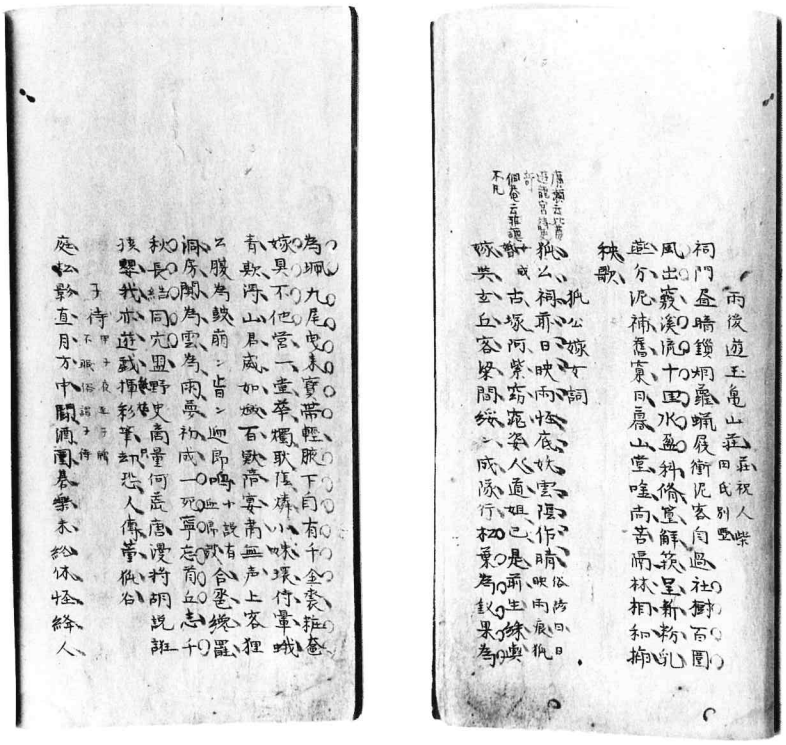


2－3　韻鏡聞書

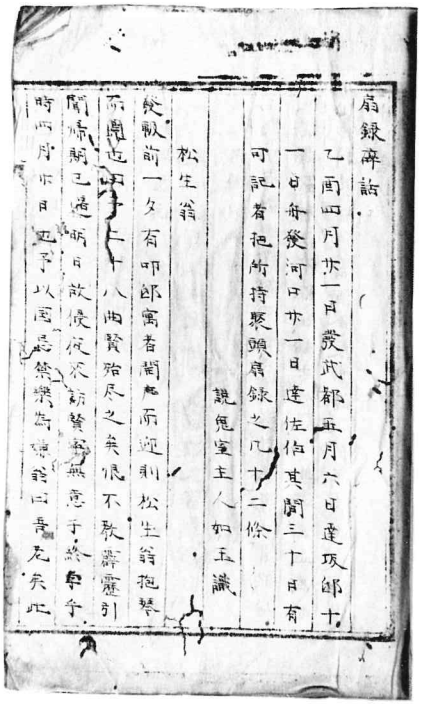
2－9　愛琴堂全集



2－9　愛琴堂全集「美人十二詠」



2－9　愛琴堂全集「狐公嫁女詞」



扇録雜話

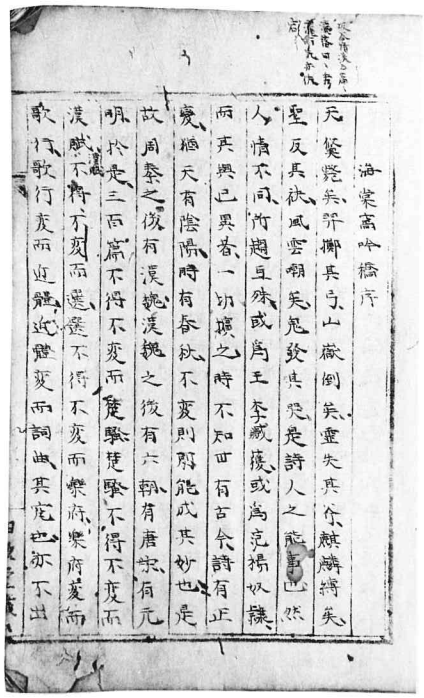
乙酉四月廿一日發武都五月六日達坂郎十一日舟發河口廿一日達佐伯其間三十日有可記者抱所持琴頭扇録之凡十二條

松生翁

鏡鬼室主人如玉識

發軔前一夕有叩邸寓者聞之而迎則松生翁抱琴而闖迫門子上十八曲賢殆尽矣恨不敢聲靡別闌帰期已過明日故侵夜來訪贈無意于終奏今時四月廿日也予以國事繁忙未能口号之矣此

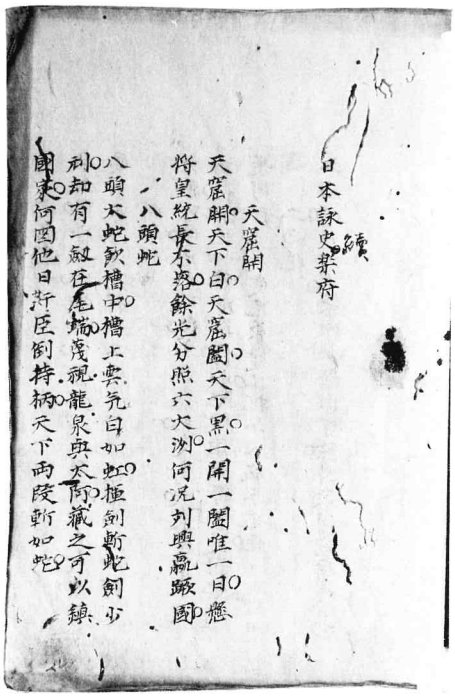
2—11　愛琴堂全集抜萃



海棠窩吟稿序

天篋經矣許卿其亦藏倒矣靈失其尔麒麟縛矣聖反其祇風雲朝矣鬼發其怨是詩人之能事也然人情不同所趨互殊或爲王李藏獲或爲京楊奴隸而其興已異者一切擬之時不知世有古今詩有正變栖天有陰陽時有春秋不變則那能成其妙也是故周秦之後有漢魏漢魏之後有六朝有唐宋有元明於是三百篇不得不變而楚騷楚騷不得不變而漢賦漢賦不得不變而樂府樂府變而歌行歌行變而近體近體變而詞曲其定也亦不出

2—10　愛琴堂全集抜萃



日本詠史續楽府

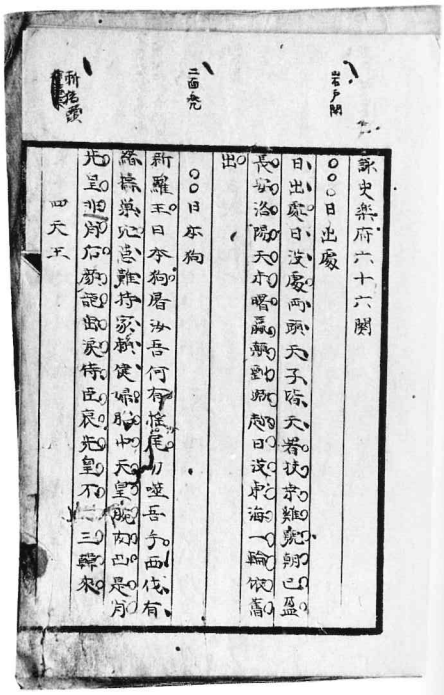
天窟開

天窟開天下白天窟閉天下黑一開一閉唯一日懸將皇統長不落餘光分照六大洲何況列興嬴蹶國

八頭蛇

八頭大蛇飲糟中糟上雲氣白如虹樹劍斬蛇劍沙刑却有一劍在尾端茂視龍泉與太阿藏之可以鎮國家何図他日新臣倒持柄天下兩陵斬如蛇

2—12　日本詠史続楽府



詠史楽府六十六闋

○○日出處

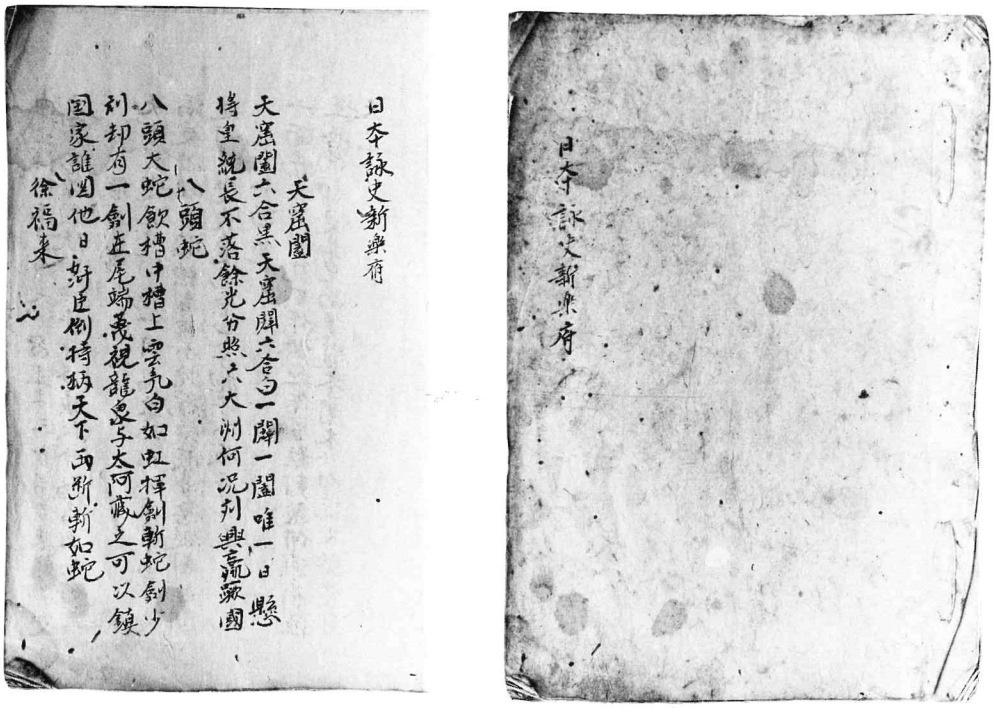
日出處日沒處兩頭天子除天若伏京輪就朝已盈長安洛陽天不曙羲和動駕日茂卓海一輪依舊出

○○日本狗

新羅王日本狗屠汝吾何有怪尾刀啞吾今西伐有繒綵與兒息誰持家鍬使婦肌中天皇腕內巴是月光皇迎帝后顏詔臣辰光皇不三韓來

四天王

2—12　〔日本〕詠史楽府六十六闋



日本詠史新樂府

天窟闔

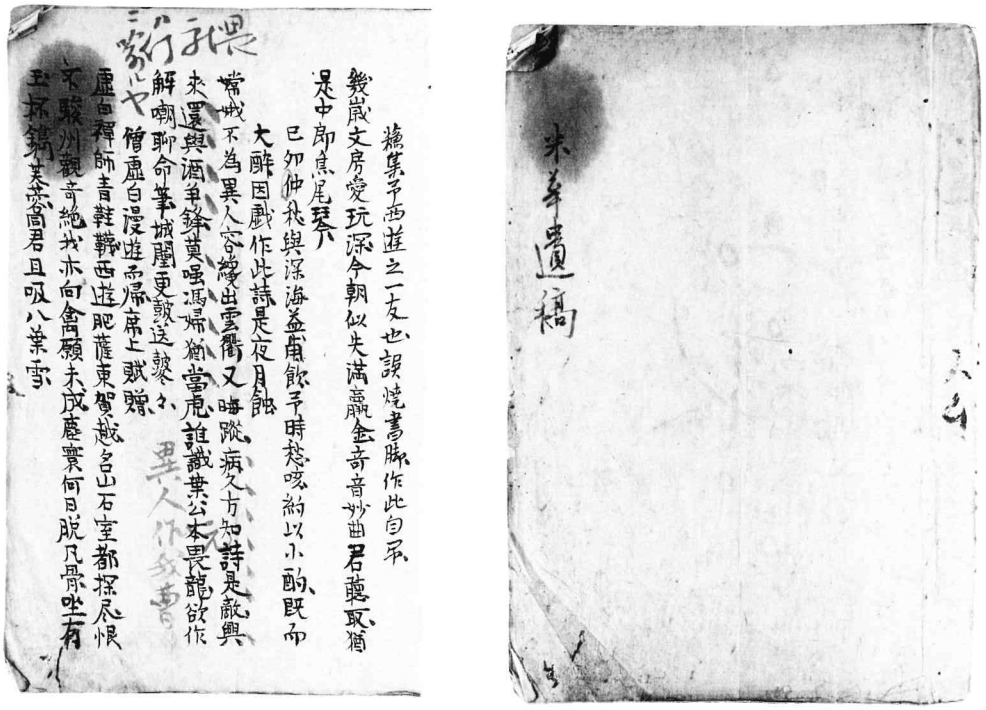
天窟闔六合黑天窟開六合白一闔一闢唯一日懸
持至統長不落餘光分照六大洲何況刑與流歐國

八頭蛇

八頭大蛇飲槽中槽上雲乳白如虹揮劍斬蛇劍少
刑却有一劍在尾端我視龍泉字太阿藏之可以鎮
國家誰國他日舒臣例持柄天下面斬斬如蛇

徐福來

2 —13　日本詠史新樂府



米華遺稿

稿集予西遊之一友也誤燒書脚作此白帝
幾歲文房愛玩深今朝似失滿贏金奇音妙曲君莫取猶
是中郎焦尾琴八

已如仲秋與深海盃甫飲予時愁咳約以小酌既而
大醉因戲作此詩是夜月蝕

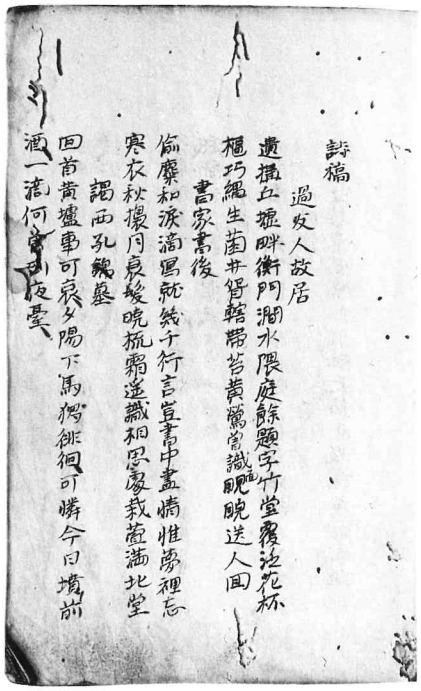
嫦娥不為異人容縹出雲鬟又晦蹤病久方知詩是敵興
來還與酒爭鋒莫嗤馮婦猶當虎誰識葉公本畏龍欲作
解嘲聊命筆城闉更鼓送謦欬

異人作文書

曾虛白漫遊而歸席上賦贈

虛白禪師青鞋韈西遊肥薩東賀越名山石室都探尽恨
不駿洲觀奇絶我亦向禽願未成塵寰何日脫凡骨坐有
玉杯鏡茶茗君且吸八葉雪

2 —14　米華遺稿



詩稿

過故人故居

遺擷五壺眸衡門淵水隈庭餘題字竹堂覆泛花杯
樞巧繩生菌井眉轄帶苔黃驚當識眼晚送人回

書家書後

偷靡和淚滴寫就幾千行言豈書中盡情惟夢裡忘
寒衣秋擾月哀髮曉梳霜逆識相思處栽蔥滿北堂

謁西孔鵠墓

回首黃壚事可哀夕陽下馬獨徘徊可憐今日墳前
酒一滴何當到夜臺

2—15　慊園敝帚

遠思樓詩集

豐後　廣瀨建子基著

諭詩贈加峯長卿中島子玉

歌詩寫情性實隨民俗移民俗雖非一體古今固多
岐（魚玉負反）（魚乎反）作家逢時變浩草互有之苟存教厚道
風教可維持背富壺町民禮樂屬禪猶江都開船
運數公建壺基乳初陳疏笑舌漸滌俠離怒是螺
蛤咏蠶此京廟犧（音云信無正）年多大家森之刻數

2—16　遠思楼詩集（二）

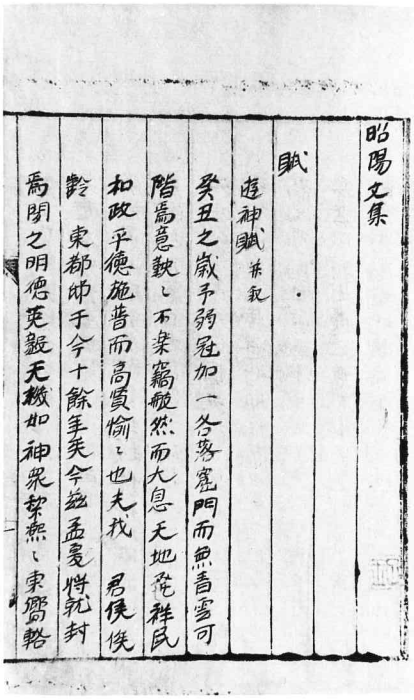
古序翼卷一

北筬　龜井昱元鳳著

毛詩周南

翼曰三代而降唯漢存古其風淳稼孝尚師授鮮有
造詣而毛公之學獨為古學其間天下尚兵鄭衆賈
馬馬融王肅之徒皆作毛詩傳至唐孔仲達作義疏
乃漢儒以下劉焯劉炫之說集而大成皆為毛詩先
後離散而小學遂為金科玉條抑毛氏敎劉傳多襲

2—17　古序翼



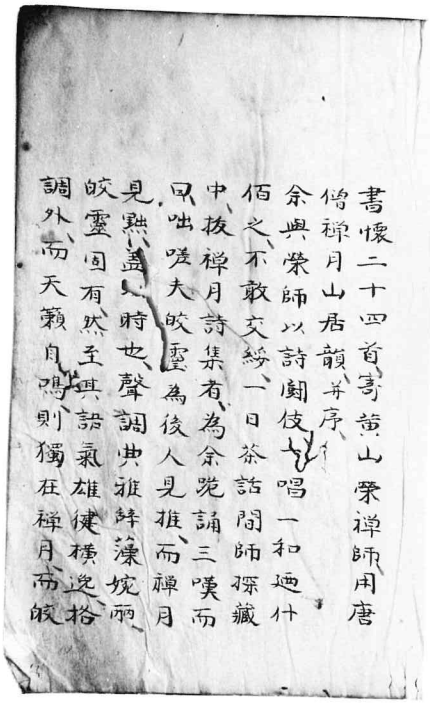
昭陽文集

賦

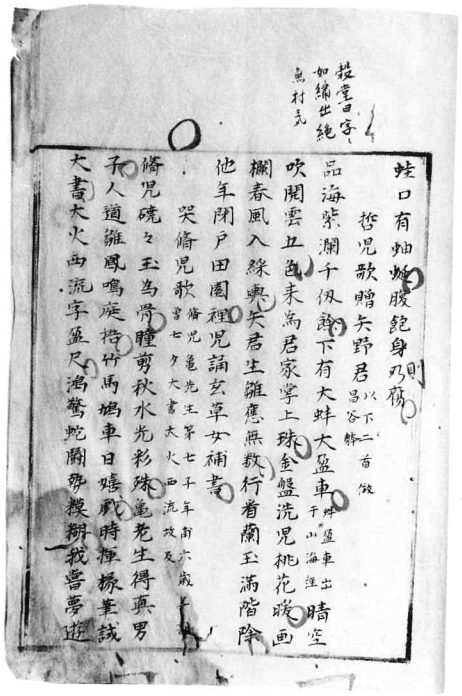
遊神賦（并序）

癸丑之歲予弱冠加一名落寞門而無言雪可
階扁邑數之不染竊嘆然而大息天地発祥民
和政平德施普而高賢倫之也无我　君侯侯
齡　東都帥于今十餘年矣今茲孟夏將就封
焉閉之明德英毅无機如神衆絜無之東爾輅

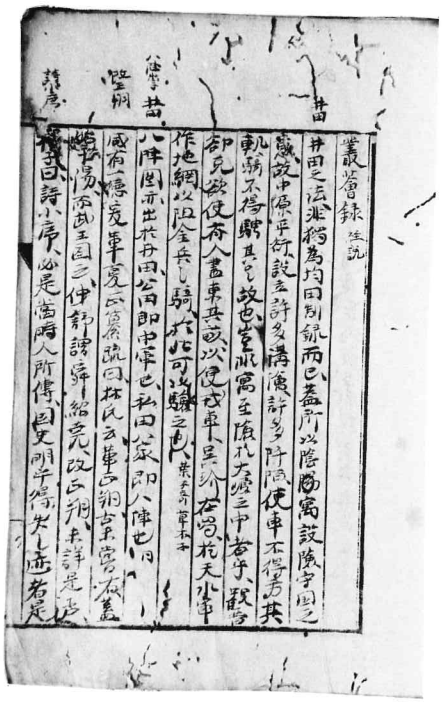
2—18　昭陽文集



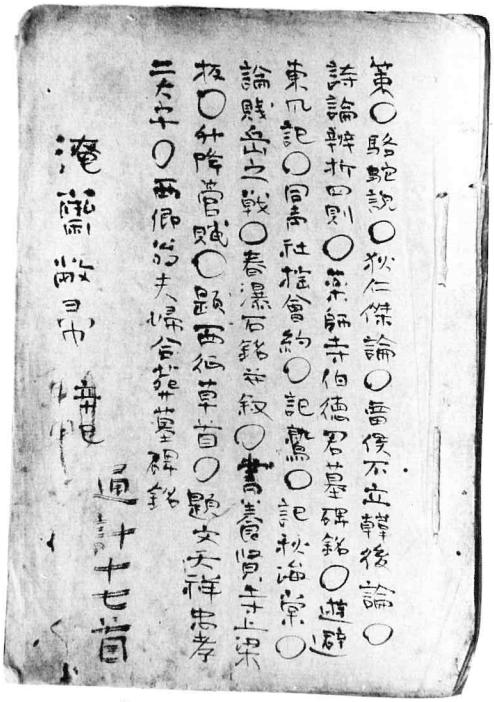
2 —19　南冥詩草



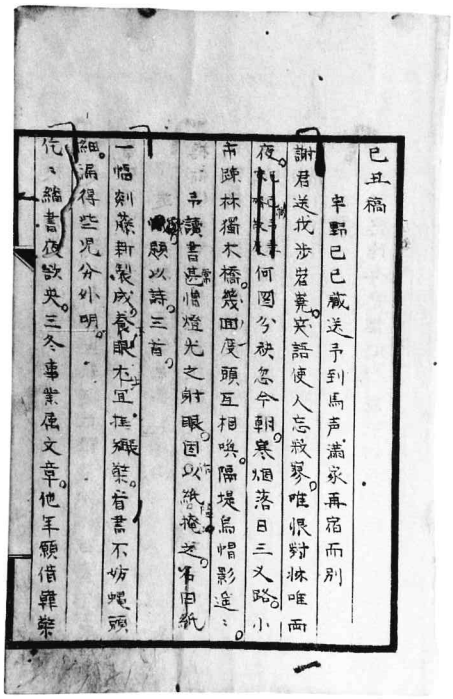
2 —20　百羅屯教練



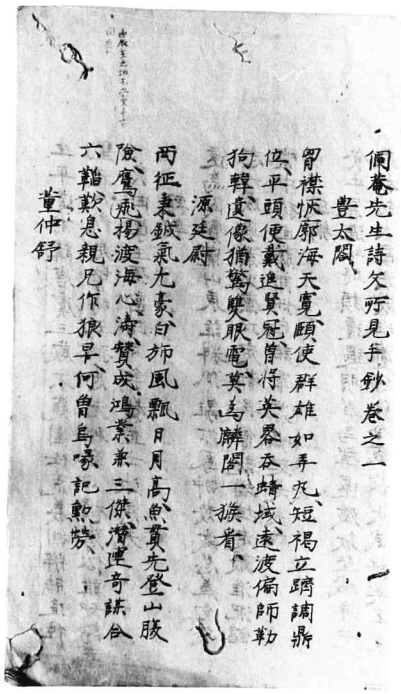
2 —21　叢薈録 経説部二 月鈔（甲申）



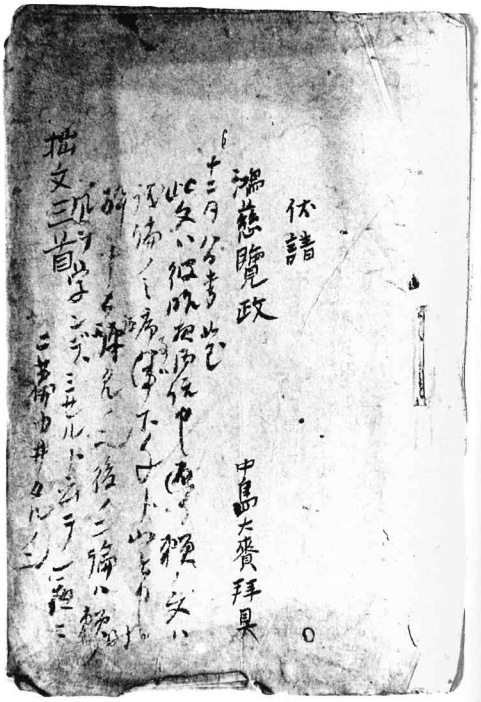
2 —22　淹斎敝帚（甲申）

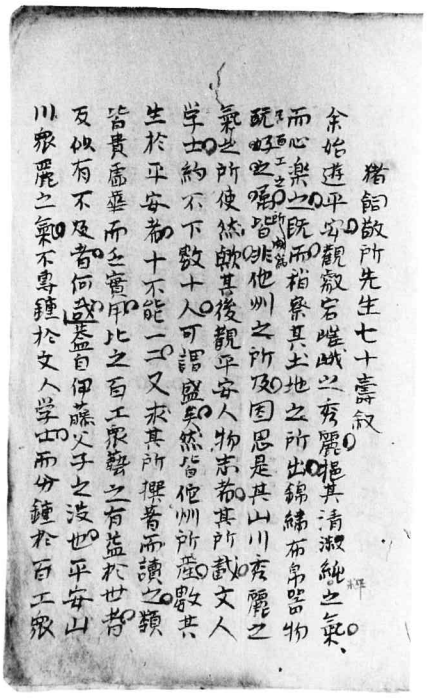


2 —23　淹斎詩帳（己丑）

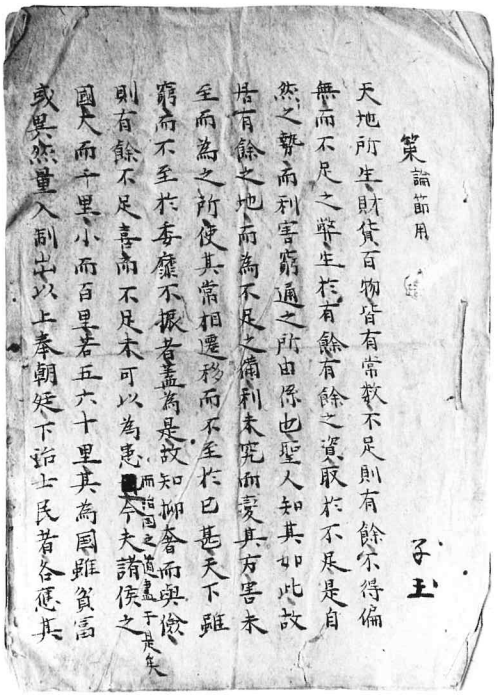


2 —24　侗庵先生詩文所見手鈔





2 —25　拙文三首

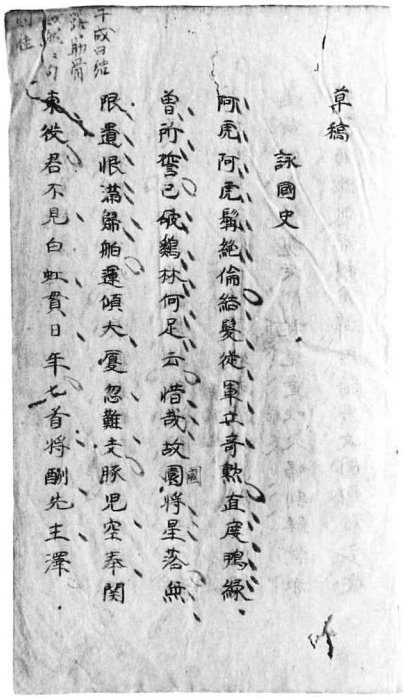


策 論節用

子玉

天地所生財貨百物皆有常數不足則有餘不得偏
無而不足之弊生於有餘有餘之資取於不足是自
然之勢而利害窮通之所由係也聖人知其如此故
若有餘之地而為不足之備利未究而憂其方害未
至而為之所使其常相遷移而不至於已甚天下雖
窮而不至於奔靡不振者蓋為是故知抑奢而與儉
則有餘不足喜而不足未可以為患（而皆因之道盡于是矣）今夫諸侯之
國大而千里小而百里若五六十里其為國雖貧富
或異然量入制出以上奉朝廷下治士民者各應其

2—26　策（論節用）

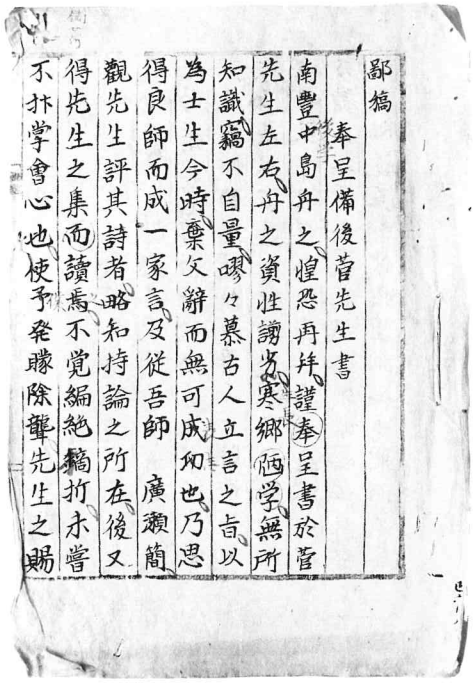


草稿

詠國史

阿虎阿虎髯絶倫綰髮從軍立奇勲直度鴉綠
曾所誓已成鵝林何足云惜哉故園將星落無
限遺恨滿歸船運傾大厦忽難支豚兒空奉閑
衆從君不見白虹貫日年七首將酬先主澤

2—27　草稿（戊寅）

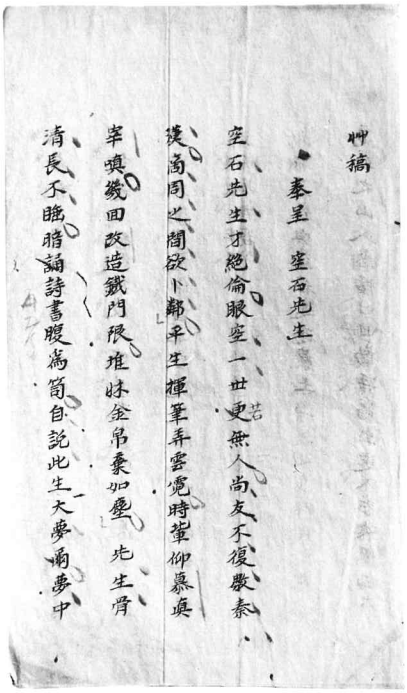


鄙稿

奉呈備後菅先生書

南豐中島舟之惶恐再拜謹奉呈書於菅
先生左右舟之資性謬劣寒鄉陋学無所
知識竊不自量嘐々慕古人立言之旨以
為士生今時棄文辭而無可成如也乃思
得良師而成一家言及從吾師　廣瀨簡
觀先生評其詩者略知持論之所在後又
得先生之集而讀焉不覺編絶竊折亦嘗
不扑学會心也使予発矇除聾先生之賜

2—28　鄙稿

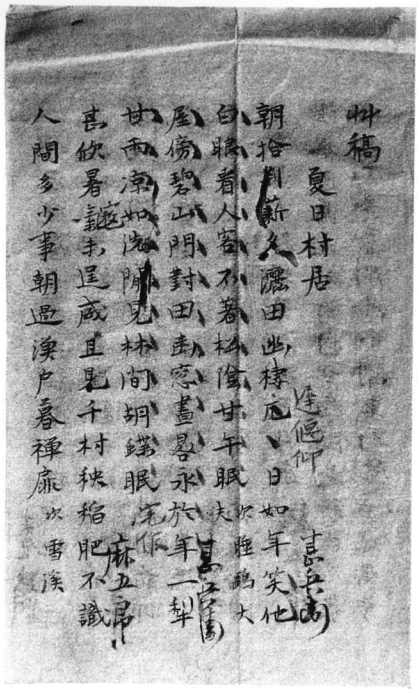


艸稿

奉呈　空石先生

空石先生才絶倫服空一世更無人尚友不復歎泰
漢商周之間欲卜鄰平生揮筆弄雲霓時輩仰慕眞
宰嗔幾回改造鐵門限堆妹金帛棄如塵　先生骨
清長不臨脩誦詩書腹為筍自說此生大夢兩夢中

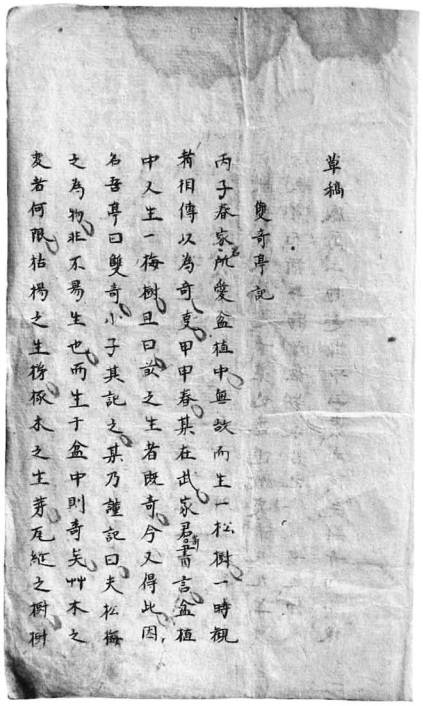
2—29　艸稿



草稿

夏日村居

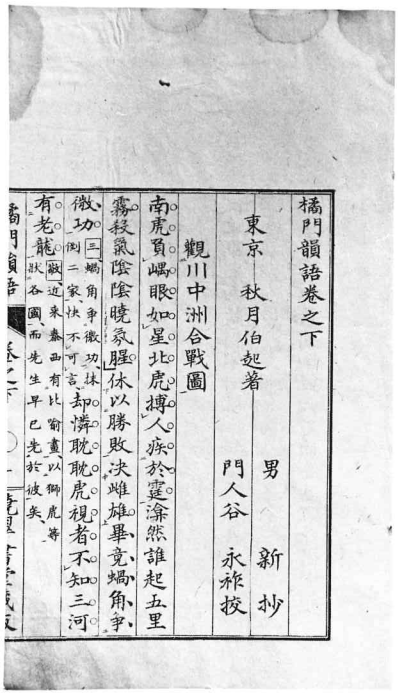
2—31　草稿



草稿

雙奇亭記

2—30　草稿



橘門韻語卷之下

東京　秋月伯起著　男　新抄

門人谷　永祚校

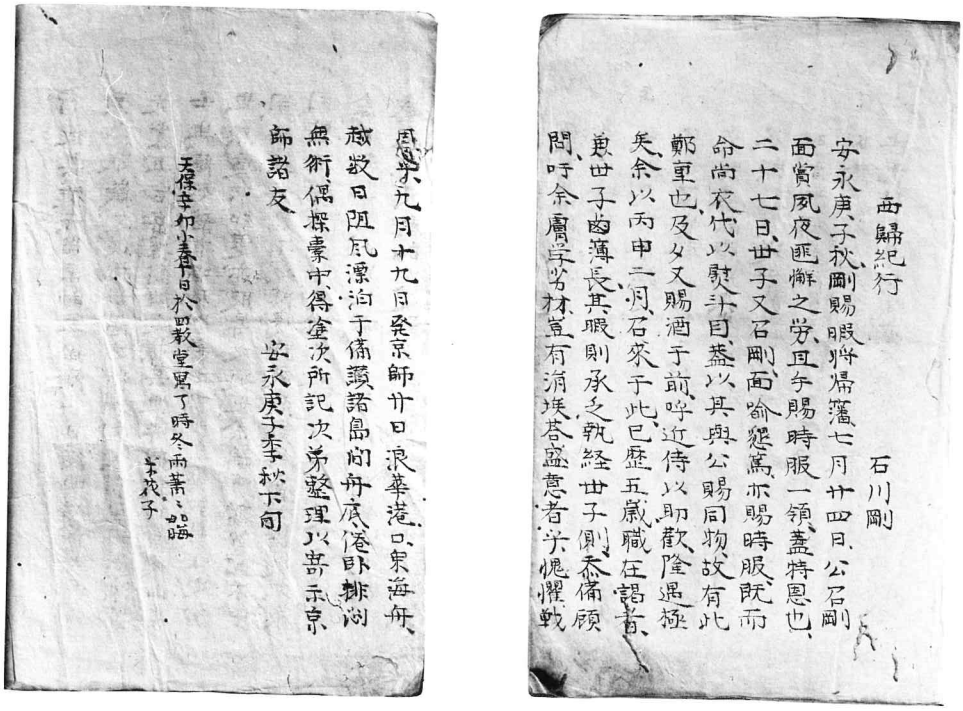
觀川中洲合戰圖

2—34　橘門韻語

拙稿

題荊明歸去來圖

2—32　鄙稿



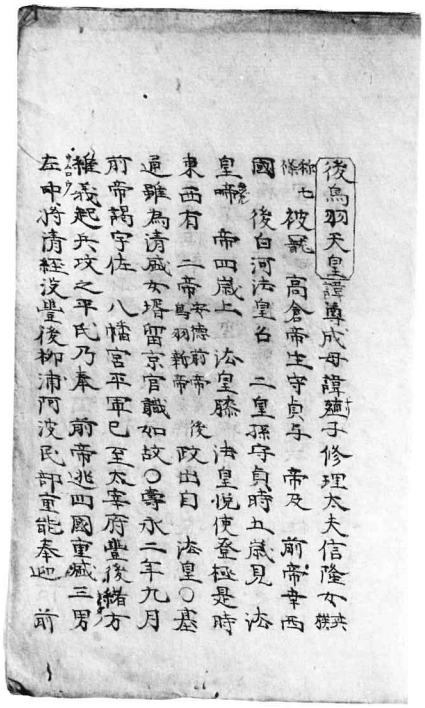
西歸紀行　　石川剛

安永庚子秋剛賜暇將歸藩七月廿四日公召剛
面賞夙夜匪懈之勞且乎賜時服一領蓋特恩也
二十七日世子又召剛面諭懇篤亦賜時服既而
命尚衣代以熨斗目盞以其與公賜同物故有此
鄭重也及夕又賜酒于前呼近侍以助歡隆遇極
矣余以丙申二月召來于此已歷五歲職在諂者
兼世子齒薄長其暇則承之執經世子側忝備顧
問吁余屬孚劣材豈有涓埃荅盛意者兮愧懼戰
慄矣九月十九日發京師廿日浪華港口乘海舟
越数日阻風漂泊于備藝諸島間舟底倦卧排悶
無術偶探囊中得奎次所記次第整理以寄示京
師諸友

安永庚子季秋下旬

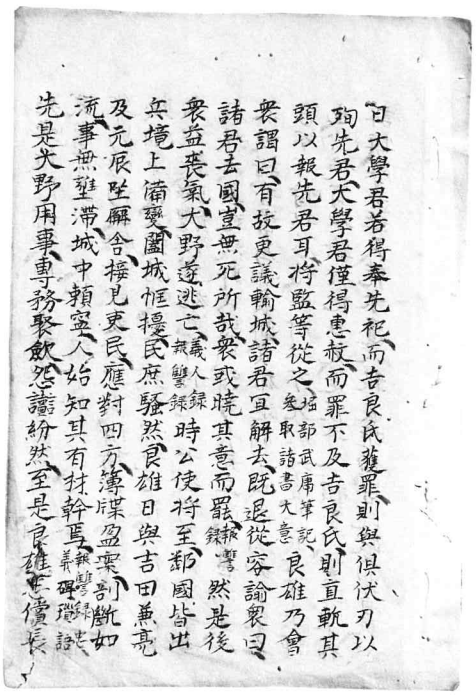
天保辛卯孟春下日於敬堂寫了時冬雨蕭蕭
半茂子

2 —35　西帰紀行



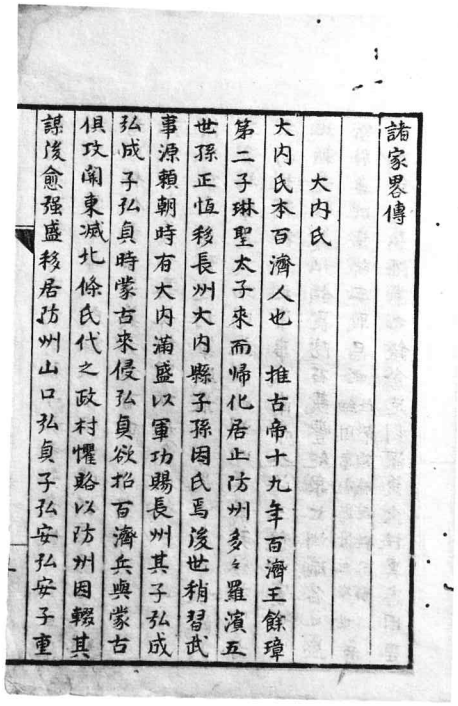
後鳥羽天皇譲尊成母譲嫡子修理太夫信隆女
柳條七　彼號　高倉帝生守貞親王　帝及　前帝幸西
國　後白河法皇召　二皇孫守貞時五歲見　法
皇嘱　帝四歲上　法皇膝　法皇悅使登極是時
東西有　二帝　安德　前帝　後鳥羽　前帝　後　政出自　法皇○基
通雖為清盛女壻留京官職如故○寿永二年九月
前帝竭守佐　八幡宮平軍已至太宰府豐後緒方
維義起兵攻之平氏乃奉　前帝逃四國軍滅三男
左中將清經沒豐後柳浦門沒民部重能奉迎　前

2 —39　国史略



曰大學君若得奉先祀而吉良氏獲罪則與俱伏刃以
殉先君大學君僅得恵赦而罪不及吉良氏則直斬其
頭以報先君耳將監等從之（塩部武庸筆記　後取諸書大意）良雄乃會
衆謂曰有故更議輪城諸君宜解去既退從容諭衆曰
諸君去國豈無死所哉衆或曉其意而罷（報讐錄）然是後
衆益喪氣大野遂逃亡（義人錄　報讐錄）時公使將至都國皆出
兵境上備變圍城恇擾民庶騷然良雄日與吉田兼亮
及元辰堅礪含接見吏民應對四方簿牒盈案剖斷如
流事無壅滯城中賴寧人始知其有材幹焉（義士錄　報讐錄　碑瑙記）
先是大野用事專務聚斂怨讟紛然至是良雄恣憤長

2 —40　赤穂四十七士伝

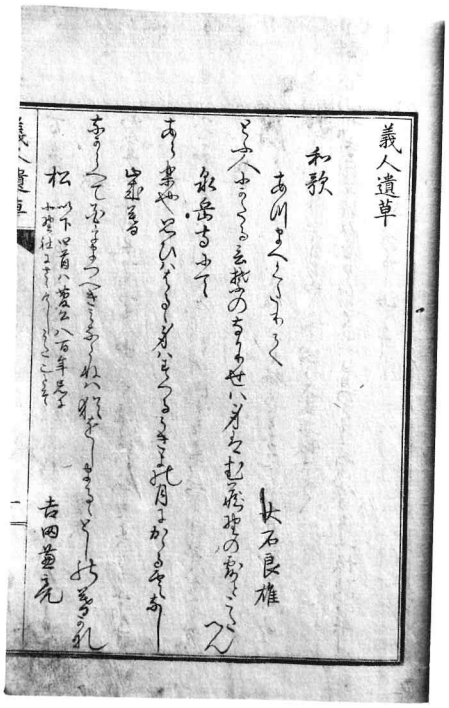


諸家畧傳

大内氏

大内氏本百濟人也　推古帝十九年百濟王餘璋第二子琳聖太子來而帰化居止防州多々羅濱五世孫正恒移長州大内縣子孫因氏焉後世稍習武事源頼朝時有大内滿盛以軍功賜長州其子弘成弘成子弘貞時蒙古來侵弘貞欲招百濟兵與蒙古俱攻蘭東滅北條氏代之政村懼賂以防州因輙其謀後愈強盛移居防州山口弘貞子弘安弘安子重

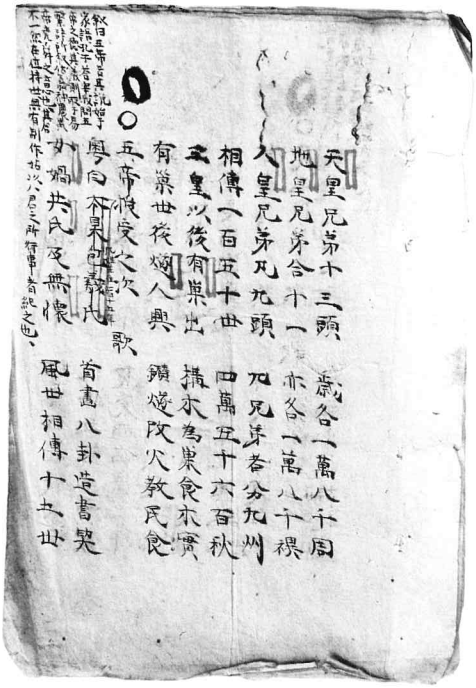
2—43　諸家略伝



義人遺草

和歌

2—41　義人遺草



天皇兄弟十三頭　歳各一萬八千周
地皇兄弟合十一　木各一萬八千禩
人皇兄弟九頭　九兄弟者分九州
相傳一百五十世　四萬五十六百秋
之皇以後有巢出　搆木為巢食木實
有巢世後燧人興　鑽燧改火教民食

○五帝授受之次　歌

首畫八卦造書契
風世相傳十五世

2—46　（五帝授受之次　歌）

合衆國伯理璽天德書翰和解

2—44　合衆国伯理璽天德書翰和解

書簡類

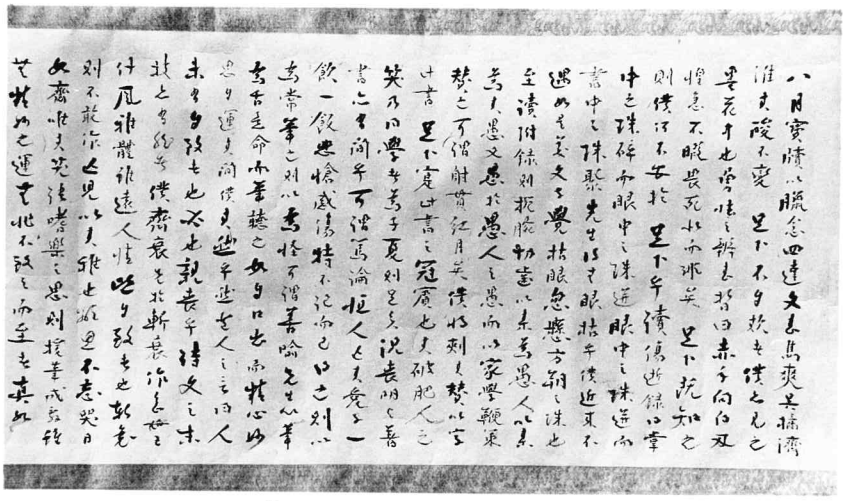
軸物（一部）

蔵書印・落款（印）他

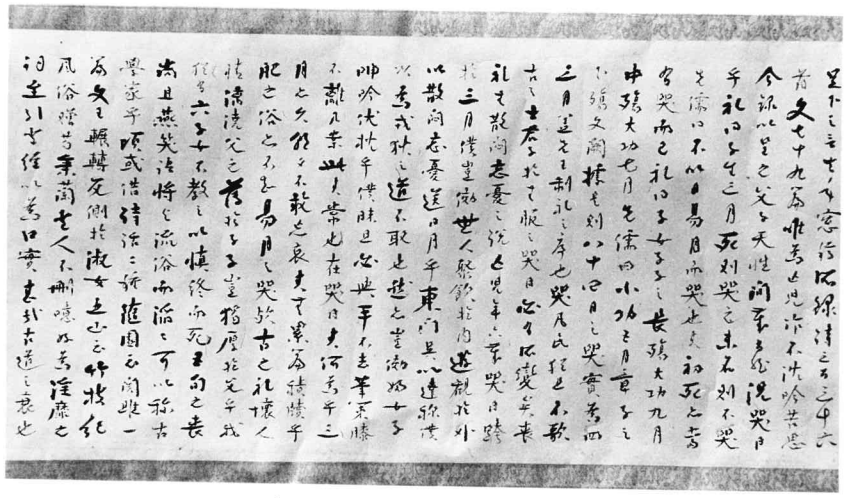
子玉愛用の硯類

〔巻物一〕　亀井昱（昭陽）より中島子玉宛書状

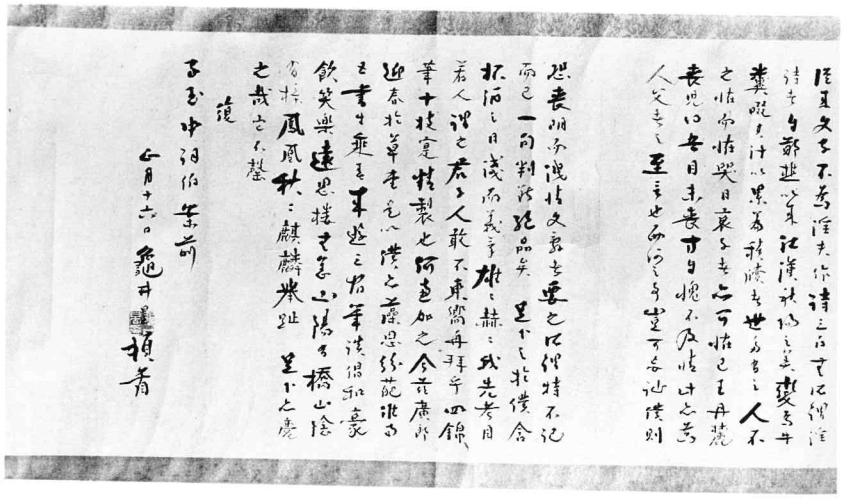
（巻頭）



中段文頭へ



下段文頭へ



（巻末）

〔巻物二〕

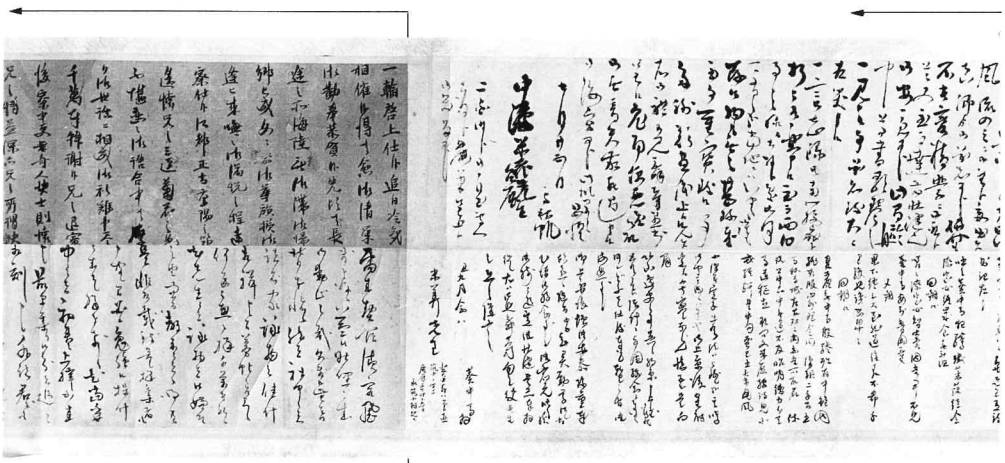
高島秋帆より中島子玉宛書状

（巻頭）

中段右へ

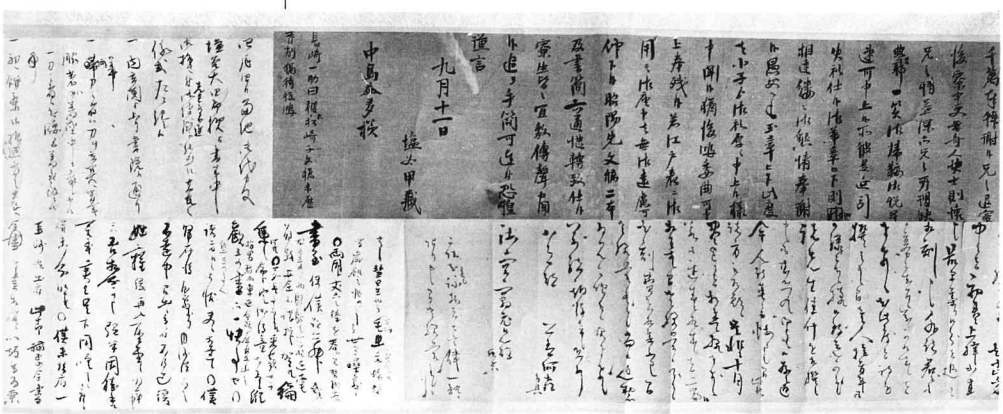
秋月橘門より子玉宛書状

下段右へ



塩谷甲蔵より子玉宛書状

次頁上段右へ



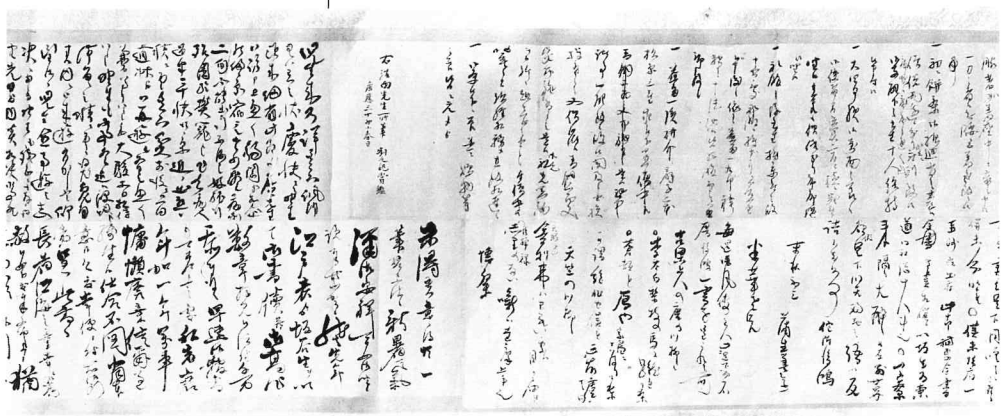
筆者不詳（子玉宛書状）

塩谷代官よりの招待状（広瀬淡窓自筆）

中段右へ

菅三中（郎か）より子玉宛書状

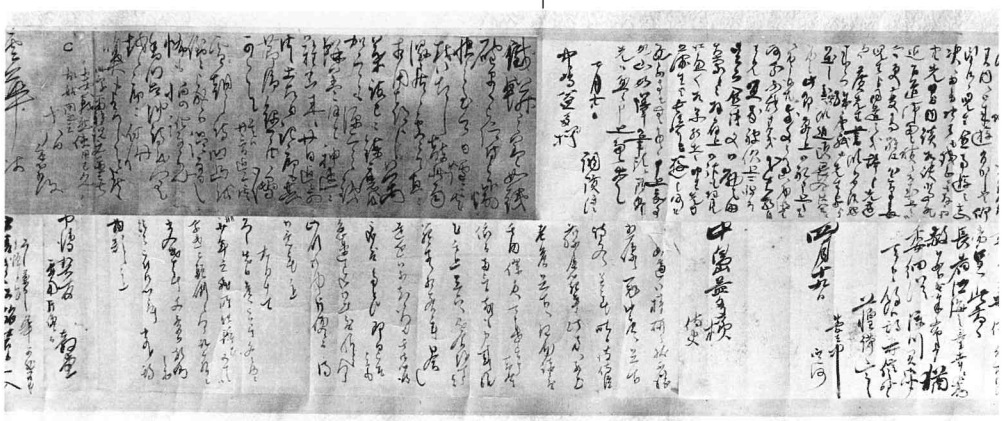
蒲生善之丞より子玉宛書状



筆者不詳（子玉宛書状）

頼山陽より雲華上人宛書状

下段右へ

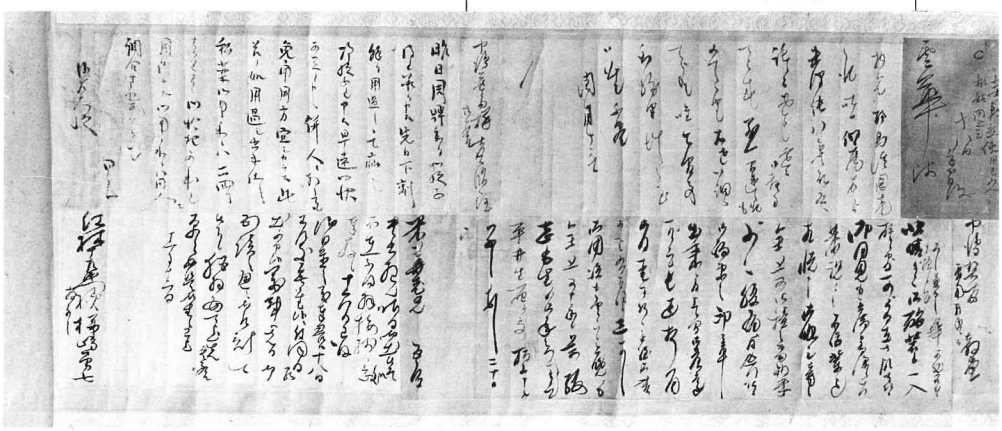


古賀穀堂より子玉宛書状

（下詳）

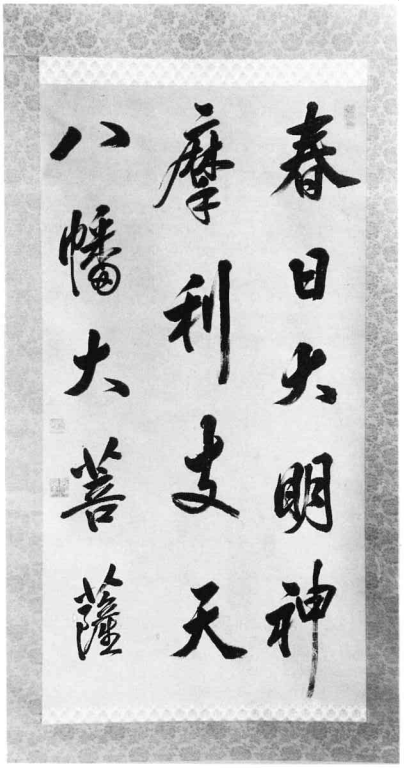
大空脩理より子玉宛書状

（巻末）



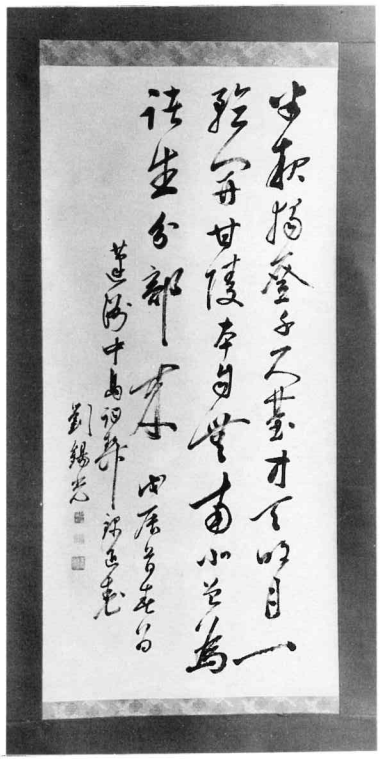
（不詳）

筆者不詳（子玉宛書状）



毛利高泰

平野五岳

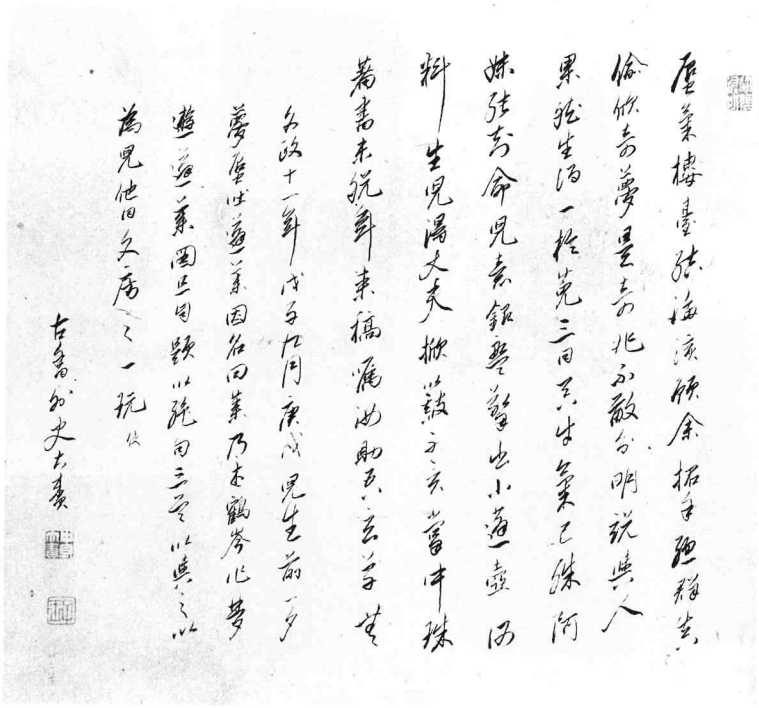


秋月橘門

亀田鵬斎

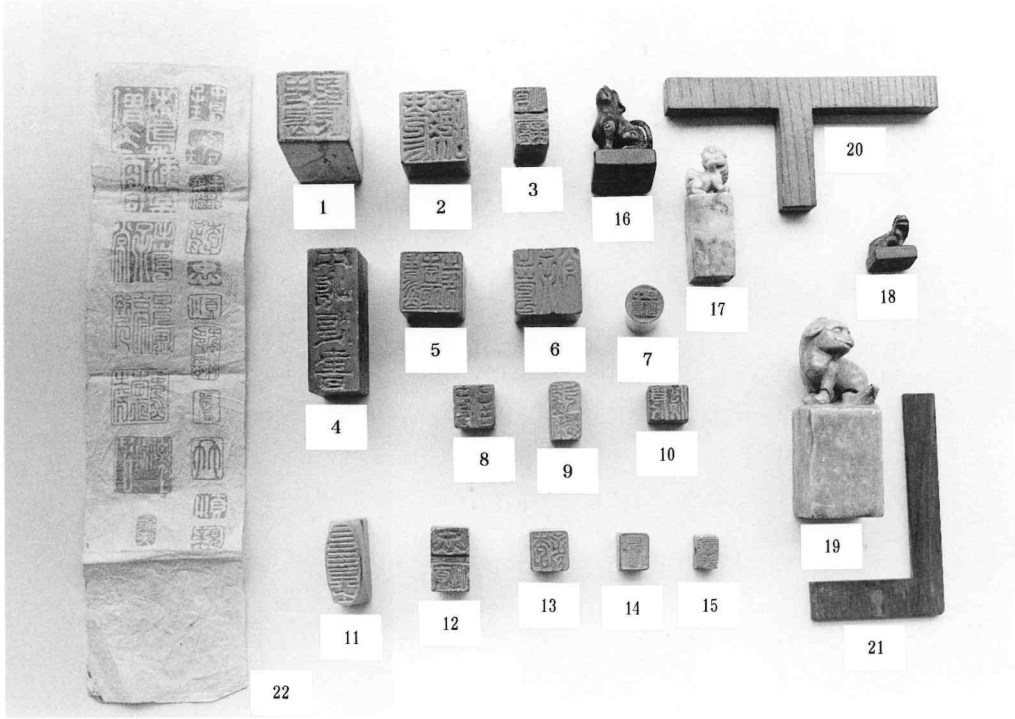
崔岑画・子玉賛

款記



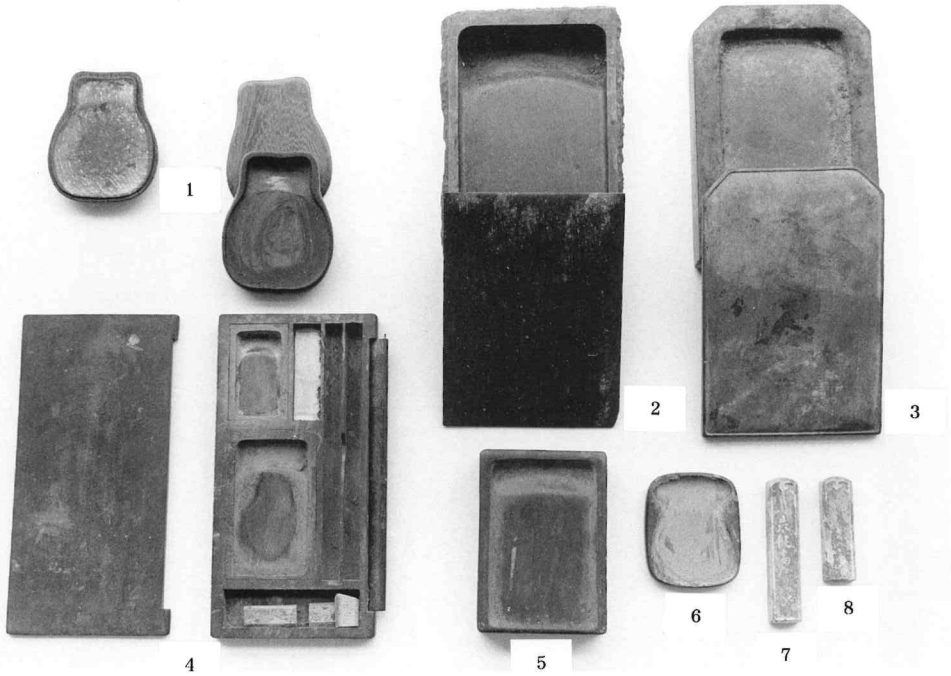
子玉賛

106-1



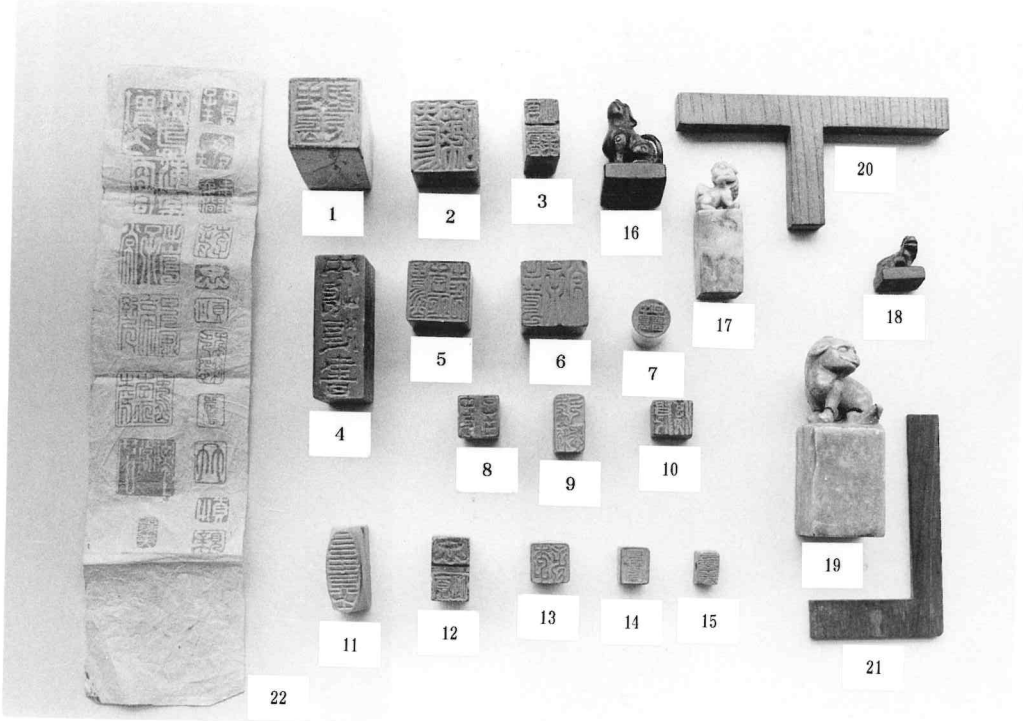
蔵書印・落款（印）他

106-2



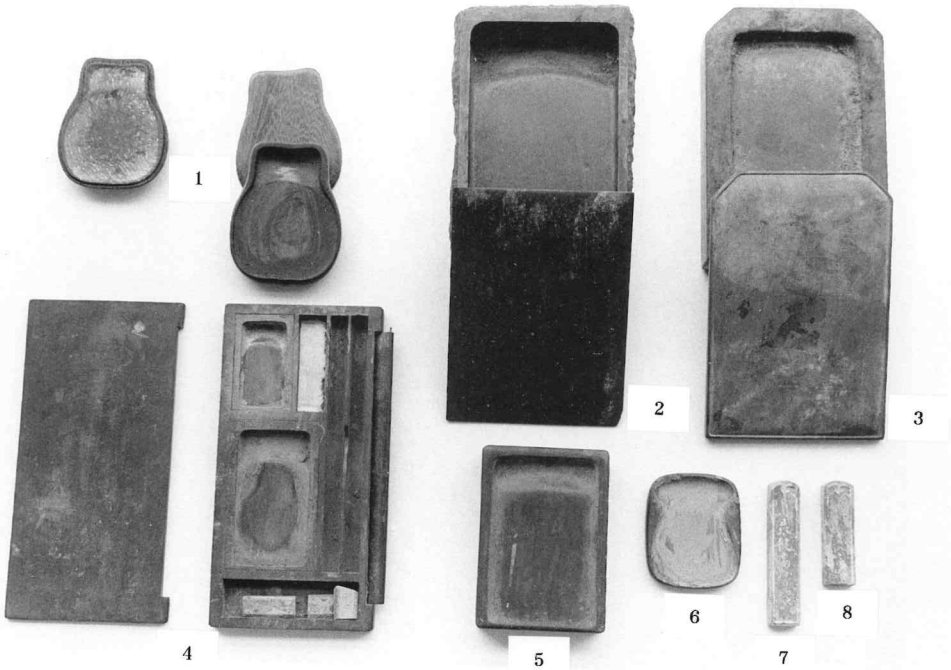
子玉愛用の硯類

106-1



蔵書印・落款（印）他

106-2



子玉愛用の硯類

中島家寄贈目録
── 佐伯藩碩学・中島子玉資料等 ──

平成２年３月31日発行【非売品】

編集　佐伯市教育委員会
佐伯市中村南町１番１号

発行　佐伯市教育委員会
教育長　鳥井喜久太

印刷　佐伯印刷株式会社
佐伯市中央区新屋敷343